般若心経

不生不滅不垢
不浄不増不減

山田無文老師筆

般若心経　目次

カバーおよび本文装画・永田耕衣

摩訶般若波羅蜜多心経

観自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。舎利子。色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識。亦復如是。舎利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不浄。不増不減。是故空中。無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色声香味触法。無眼界。乃至無意識界。無無明。亦無無明尽乃至無老死。亦無老死尽。無苦集滅道。無

智亦無得。以無所得故。菩提薩埵。依般若波
羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖
遠離一切顛倒夢想。究竟涅槃。三世諸仏。
依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提
故知。般若波羅蜜多。是大神呪。是大明呪。
是無上呪。是無等等呪。能除一切苦。真実
不虚。故説般若波羅蜜多呪。即説呪曰。
羯諦。羯諦。波羅羯諦。波羅僧羯諦。菩提薩
婆訶。般若心経。

偉大なる智慧の
真理を自覚する
肝心な教え

自由に真理を観る眼の開けた菩薩は、その深い英智に依って、肉体も精神も、すべて空であると達観して、一切の苦悩災厄から免かれる。

舎利弗よ。肉体は空を離れては無い、空は肉体を離れては無い。肉体はそのまま空であり、空はそのま

ま肉体である。感覚も想念も意欲も、或は自我という精神組織も、みなその通りである。
舎利弗よ。すべては空であるから、生ずることも無ければ、滅することも無い。垢れもしなければ、奇麗にもならない。増えもせねば減りもせん。
だから空の中には、肉体も無く、感覚も想念も意欲も自我も無い。眼も無く耳も無く鼻も無く舌も無く躰も意も無い。色も無く声も無く香も無く味も無く触れられるものも無く、想われるものも無い。嘗て

見た世界も無ければ、嘗て想うた世界も無い。盲目的本能も無ければ、盲目的本能の無くなることも無い。また老死の苦しみも無ければ、老死の苦の尽きることも無い。苦悩も無ければ、苦悩の因である貪愛も無い。苦悩からの救いも無ければ、そのための修行も無い。知ったというものも無ければ、得たというものも無い。本来得らるべき何ものも無いからである。

菩薩方は、このような徹底した英智に依って、心中

何のこだわりも無い。こだわりが無いから、恐怖も無い。恐怖が無いから、あらゆる混迷邪見な想念から救われて、永遠に清寂なる境地を得られる。三世の諸仏も、この偉大なる英智に依って、その尊最なる普遍的人格を自覚されるのである。だからこの偉大なる英智こそ、最も神秘的な呪文であり、最も光輝ある呪文であり、地上最高の呪文であり、他に比類なき呪文である。この呪文が世の一切の苦難を排除することは、まさしく真実であって、

一点の虚妄も無い。
ではその偉大なる英智の呪文を示そう。
救われた。救われた。
完全に救われた。
みんな完全に救われた。
ここがお浄土だった。

ゑしるす

はじめに

もっとも短いお経

般若心経は、数あるお経の中でも一番短いものだと言われており、本文がわずか二百六十二文字、題号を入れて二百七十二字しかないのであります。比較的、仏教の各宗派においてよまれており、さらに修験道、神道の中でも、この般若心経をよまれる宗旨があります。

簡にして要、約にして深し

弘法大師も、『般若心経秘鍵』という註釈書を書いておられますが、その中で、「文は一紙に欠け、行は則ち十四。謂っつ可し、簡にして要、約にして深し――たった一枚の紙に書けるだけのお経である。しかも行は十四行ですむ。実に簡単で要領を得ており、短いけれども、その意味はなかなか深遠なものである」と評しておられます。

我輩の理論、尚お未だ一巻の般若心経に及ばず

唐の李翺という学者は般若心経をよんで、「我輩の理論、尚お未だ一巻の般若心経に及ばず。仏教豈に知り易からんや」という言葉を残しておられます。李翺は大変な学者で、一代学問をし、一代理論をし、文章も書いて来たが、ついに一巻の般若心経にも及ばなかった、「仏教豈に知り

易からんや」と匙(さじ)を投げておるのであります。まことに、「簡にして要、約にして深し」であります。

「一番やさしくて、一番ためになる本は何ですか」と尋ねたら、「それは般若心経だ」と言った人があるそうですが、外国では「一番やさしく一番ためになる本はバイブルだ」という言葉があるそうであります。

玄奘三蔵の翻訳

今日、私どもがよんでいる般若心経は、玄奘三蔵(げんじょうさんぞう)の翻訳になっておりますが、般若心経には七種類ほどの翻訳が、今日残っております。その中で、普通に行なわれておるのが、この唐の玄奘三蔵の翻訳であります。玄奘三蔵は二十六歳の時に中国を脱走してインドへ行ってお経を求めて来たのでありますが、その詳しい旅行記が、有名な『大唐西域記(だいとうさいいき)』という本になっております。

『大唐西域記』

唐の貞観三年(六二九)、玄奘は、遠くインドの仏典を将来したいとの大願を起こし、時の皇帝太宗にお許しを願いますが、皇帝は、玄奘の才

能を惜しむあまり、危険を犯して遠い異国に行くことはお許しになりません。しかし、願心止みがたく、玄奘はついに密かに国境を脱して、言語に絶するような艱難辛苦をなめて、西域を経て中央アジアに到り、ついにはインドに入ったのであります。

それから各地で経典を求め、また梵語を研究すること十四年、再び苦労の旅を続けて長安に帰られたのであります。その間、実に十七年、まことに驚くべき精神力であります。ずいぶんと苦労をなされて、大般若六百巻、その他数多くの経典を持って帰られたので、玄奘の出国に反対した太宗皇帝も、大いに喜ばれ、訳経院を造り、また一切の費用を出されて訳経の大事業を援助されたのであります。

この般若心経の翻訳は唐太宗の貞観二十三年（六四九）五月二十四日に、終南山にある翠微宮という離宮で翻訳されたということですが、その日から三日たった五月の二十七日に太宗がなくなっております。つまり玄

奘三蔵は太宗の病気見舞いに行かれて、太宗の末後を慰めるために、あるいは安楽往生の祈願をこめて、この般若心経を翻訳されたと考えられるのであります。

この時、玄奘三蔵は四十八歳でありました。西暦の六四九年ですから、一三〇〇年あまり前のことであります。一三〇〇年来、何千万人という人に、毎日のようによまれて来た、もっとも広く普及したお経が、この般若心経であります。

このように、般若心経はほとんど各宗でよまれているのですが、本当の宗教体験があるならば、どんなお経をよんでも、それが味わえなくてはウソだ。禅宗で本当に悟りを開くならば、親鸞の境地も分かり、日蓮の世界も分かり、法然の心境も分かる、キリストの境地も分かる。本当の宗教であったら、そこに必ず一つ生命的につながるものがあって、必ず分かる。

ほんとうの宗教ならば、必ずつながるものがある

それが分からずに矛盾をするようであったら、その人の宗教体験が間違っておるか、その経典がぜんぜん間違っておるか、どっちかだと思うのであります。正しい経典を正しい宗教体験をした者がよめば、宗旨を超越して、そこに分かるもの、味わえるものが、必ずなくてはならんと思うのであります。

其れ摩訶般若波羅蜜は諸仏の母なり

この般若心経は、日本では奈良朝時代から非常に普及をしたもので、光仁天皇の宝亀五年四月に、勅令でもってこの般若心経を各家ごとに、備えさせられたことがあり、その時の勅令が、『続日本紀』に出ております。

其れ摩訶般若波羅蜜は諸仏の母なり。天子之れを念ずれば、則ち兵革災害、国中に入らず。庶人之れを念ずれば、則ち疾疫癘鬼家内に入らず。此の慈悲に憑って、彼の短折を救わんと思欲し、宜しく天下の諸国に告げて、男女老少を論ぜず、起坐行歩、咸く摩訶般若波羅蜜を念誦せしむべし。

天子これを念ずれば、兵革災害、国に入らず

そのころ非常に悪い疫病がはやり、医薬をもってしてもどうしても治らない。そこで国中に触れを出して、皆に般若心経をよませたのであります。

其れ摩訶般若波羅蜜は諸仏の母なり——この般若の智慧から仏が出て来るのである。天子之れを念ずれば、則ち兵革災害、国中に入らず——一国の天子がこの般若心経を信じて念じるならば、外国から攻めても来ないし、国内に災害もない。庶人之れを念ずれば、則ち疾疫癘鬼家内に入らず——一般の庶民がこれを念じるならば、悪い病気にもならないし、物の祟りも家の中には入って来ない。こういう功徳があるから、悪いはやり病で早死にする人々を救うために、この般若心経を普及させるのである。こういう勅令であります。

それ以前に淳仁天皇の天平宝字二年にも、ほぼ同じような勅令が出ております。平安朝になって嵯峨天皇の時に、また悪疫が流行して、その時には嵯峨天皇が紺紙に金泥で般若心経を書いて巻物にされ、その扉に

檀林皇后が、三尊の弥陀の絵を描かれて、それを弘法大師が祈禱されたら、悪疫がたちまちに消え去ったということであります。

勅封心経殿

その紺紙金泥の般若心経は嵯峨の大覚寺に納められ、勅封心経殿という宝蔵が作られた。国家に事ある時には勅使が来て、その般若心経の封を切って祈禱をし、また封をして奉安するのですが、その中には、後光厳天皇、後花園天皇、後奈良天皇、正親町天皇、光格天皇という方の直筆の般若心経が納められておるのであります。蒙古襲来の時には、亀山天皇が二百五十人の殿上人を集めて、一日に三十万巻の般若心経をみずからが唱えられ、蒙古の退散を念じられたということであります。

第二次大戦の時にも、ずいぶん方々で般若心経がよまれたものであります。嵯峨の大覚寺では、この勅封心経殿を開いて祈禱をされたはずであります。「それでも、戦争には負けたではないか。兵革災害、国中に入らず、と言うけれども、アメリカが進駐して来たではないか」、こう言わ

れるかも知れませんが、兵革災害、国中に入らず、天子みずから率先してこの般若心経を念じて行くならば、外国から侵略しては来ない、ということが言われておるのであり、こちらが侵略しても必ず勝つ、というようなことは書いてない。庶人がこれを念ずれば、祟りや泥棒が入らんということは書いてあるか知らんが、こちらが泥棒に行ったら、必ず成功するとは書いてないのであります。

よその国に侵略に行かずに、また外国が攻めて来やしないかとうろたえて再軍備をしたり自衛軍を作らずに、国中が、本当に平和論者になって、皆がその般若の心で生きて行くならば、攻めて来ようが、国の中に入りようがない、ということでありましょう。

般若心経は、このように一面では現世利益として非常に尊ばれて来たものであります。終わりのほうに、「是れ大神呪なり、是れ大明呪なり、是れ無上呪なり、是れ無等等呪なり。能く一切の苦を除く」とあります

現世の災難を逃れ、幸福を与える

が、実に偉大な神の力をもって一切の苦しみを救う、ということで、現世の災難を逃れ、幸福を与えられるという意味に、広く行なわれてもおるのであります。これはあくまでも、第二義門ではありますが、一般にはそうして広く行なわれておるのであります。

塙保己一の般若心経信仰

民間でこの般若心経をもっともよく信じられたのは塙保己一という、あの有名な江戸時代の盲人の学者であります。この方は幼い時に目が不自由になり、何でも学問の道で出世をしたいと志しを立てて、江戸に出られたのであります。自分は目は見えないが、何とか学問で身を立てたいと、始終、神田の平河明神に参られたそうです。

ある正月の元日に明神さまに参ったところ、雪の中で転んで下駄の鼻緒を切ってしまった。そこで近くの家を訪ねて、鼻緒をつけてもらうように頼むと、その家の主人が出て来て、

「縁起でもない。正月の元日に盲が入って来て、しかも鼻緒を切ったなん

て。何て今年は縁起が悪いのか。まっぴら、断る」
と叩き出されてしまった。いかにも残念だ、くやしい。そこで、明神さんへお参りして、
「どうぞ私を立派な学者にして下され。今日から一代に、百万遍の般若心経をささげますから、どうぞひとつ、私の願を届けて下され」
と、そういう願をかけて学問をされたそうであります。果たして、後に大学者になられて、諸国の大名、お寺やお宮に残っておる貴重な写本の絶えるのを惜しんで、それらの珍本を全部集めて、『群書類従』の出版という大事業を始められたのであります。その出版をする時に、神田からある貧乏な版木屋を呼んで来て、仕事を託されたところ、その版木屋が、
「江戸にはたくさんの版木屋がありますのに、私ごときにこんな仕事をお命じ下されてまことにありがとうございます」
と言いますと、保己一が、

「おまえは忘れたかも知れんが、何年か前の正月の元日に、下駄の鼻緒を切って、助けを求めておまえの家に転がり込んだ盲がおろう。あの時におまえから外に放り出されたのがわしじゃ。版木屋だということを聞いて、おのれくやしい、一代のうちに敵(かたき)はとってやらんならんと思って勉強をして来たが、今日、考えてみると、敵どころではない、おまえはわしにとっては非常な恩人だ。おまえのためにわしはどんなに発憤したか知れん。どうぞひとつ、わしのお礼を受けるつもりで、この仕事をやってもらいたい」

と言われたということであります。群馬県でしたか、保己一先生の郷里に、日記が残っておるそうでありますが、その日記には、「今日は二百巻」「今日は二百五十巻」と般若心経をよまれた回数が書いてあるそうで、亡くなられる一月前までで計算すると、二百七十万巻になったそうであります。

これははっきりと数が分かっておる、民間の格別に熱心な般若心経の信者であります。このように、昔から一般にこの般若心経というものが広く行なわれておるのであります。今日でも、これほど広く民間に親しまれ信仰されて、よまれておるお経は、他にはないと思うのであります。

第一講

摩訶般若波羅蜜多心経（まかはんにゃはらみたしんぎょう）

偉大なる智慧の真理を自覚する肝心な教え

この摩訶という言葉は、玄奘三蔵の翻訳にはないのですが、日本に来て、いつのまにやら摩訶という言葉がつくようになったようです。鳩摩(くも)羅什(らじゅう)三蔵の翻訳には摩訶がありますが、玄奘三蔵の翻訳には、本来ないのであります。

摩訶般若波羅蜜多心経。これが、この経典の題号であります。摩訶般若波羅蜜多心経と、十字でありますが、そのうちの八字は実は梵語、インドの言葉であり、終わりの心経という二字だけが中国の言葉であります。十字のうち八字まで、外国の言葉を使っておるのであります。

この玄奘三蔵は、求法のためにあえて法を犯し、中国を脱走して、いくたびか官憲に捕まって危ういところを逃げまわって、インドに入り、インドに滞在すること十数年。往復十七年かかって幾多の経典を持ち帰られたのですが、帰ってみると唐の太宗が非常に信頼をして、優遇して、洛陽の都に迎え、その翻訳事業を国家の事業としてやられたわけであり

ます。

そこで、いろいろと設備を整え、多くの学者を集めて翻訳事業が始められた。まずたくさんある経典の写本を集め、間違いがありはせんかと、比較研究する役の者。あるいはそれを直訳していく者。その直訳されたものに修辞していく者と、ずいぶんと大がかりな翻訳事業をやられたのですが、その翻訳について、「五種不翻」という約束ごとが設けられておった。五つの言葉は翻訳をせずに、原語のままでおく、ということであります。

五種不翻の原則

秘密の故に訳さず

第一には秘密の故に訳さず。般若心経の終わりのところには、「羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦」とありますが、これは神仏に唱える呪文ですから、神仏にだけ分かればいいのであって、人間には秘密である。こういった秘密の言葉は翻訳をしないのであります。このごろも、お医者さんが病人の前で病状を話す時には、ドイツ語など外国の言葉を使う

そうですが、これも病人には秘密のほうがいいからでありましょう。

多義の故に訳さず

また二番目は、多義の故に訳さず。一つの言葉でいろいろな意味があるから、どれか一つの意味だけを取ると、他の意味が欠けてしまう。そういう言葉は翻訳をせずに原語のままで置く。

此の地に無きものは訳さず

三つ目には、此の地に無きものは訳さず。インドにはあるがこちらにはないもの、翻訳のしようのないものは原語のままで置くのであります。外国の人でも富士山のことはフジヤマと言いますが、これは固有名詞であるから翻訳のしようがないわけです。

古風を存するが故に訳さず

四番目には、古風を存するが故に訳さず。既に玄奘三蔵までには、数百年来、旧訳が行なわれておりますから、昔から使いなれた言葉については、改めて翻訳し直す必要はないのであります。古風を尊んでそのままに残しておく。

訳さざるを以て利多しとす

五番目には、訳さざるを以て利多しとす。翻訳をしないほうが便利な

言葉がある。近ごろはメートル法が行なわれておりますが、これなども翻訳などせずに外国と同じように使っていくのが、外国と取り引きする場合には便利であります。インドでも中国でも朝鮮でも、既に使っておる言葉であるから、日本だけが特別に邦訳をしないほうが都合がいい、そういう言葉もあるわけであります。

こういう「五種不翻」という原則があったのですが、この摩訶般若波羅蜜多の八字もその原則に従って、原語のままで置かれておるのであります。

摩訶（まか）

摩訶には、大、多、勝の三義有り

そこで、まず最初の摩訶であります。日本では、「摩訶不思議」などとよく使われておりますが、「摩訶には大、多、勝の三義有り」、これには大、多、勝の三つの意味があると言われております。摩訶般若は、普通、

大般若と訳しておりますが、摩訶には、「大」という意味だけではなく、「多──非常に数が多い」「勝──すぐれている」という意味もあるのです。ですから大般若と訳してしまえば、「多」と「勝」の意味が落ちてしまうから、摩訶と言うのであります。「摩訶には大、多、勝の三義有り」。摩訶は、ただ大きいだけではなく、その中にはいろいろな複雑な内容があり、しかも、その内容が非常にすぐれておる。それが摩訶であります。

般若(はんにゃ)

次の般若という言葉は、原語でプラジュニャー、智慧と翻訳をしておりますが、これも単に智慧と訳してしまいますと、われわれがへいぜい使っている分別の知恵、理知の知恵に誤解されやすい。この般若の智慧は、根本智と言って、理知分別の出て来る以前の根本になる智慧でありますす。いわゆる空の分かる智慧、絶対の分かる智慧、無限の分かる智慧

理知分別の出てくる以前の根本智

が般若の智慧であります。
ところが、私どもが学問をしていく知恵は、対立の知恵であり、分別の知恵であり、相対的な知恵である。この般若も、智慧と訳さないほうが利益が多いから、原語のままで使っておるのであります。
白隠禅師の『坐禅和讃』には、

三昧無礙の空ひろく、四智円明の月さえん

とあります。坐禅して、本来無一物の境界が分かるならば、そこに仏の

四智

四智が、秋の明月のように輝き出て来るのであると。この仏の四智とは、大円鏡智、平等性智、妙観察智、成所作智であります。

大円鏡智

大円鏡智とは、われわれの心の本体であり、縦には三世を貫き、横には十方に弥綸して、大宇宙の一切を受け入れるような鏡のごとき智慧であります。

平等性智

平等性智とは、その清浄な鏡が、外の世界を眺めるならば、一切を平

等に映していく、男も女も老人も子供も、金持ちも貧乏人も、美人もおへちゃも、すべて平等に映すように受け入れていく智慧であります。

妙観察智

妙観察智とは、いちいちの現象について、その構造、意義、作用などを微細に観察していく智慧であり、また、それに対して適宜に処置をしていく智慧であります。科学的研究、芸術的創作、行政的手腕、宗教的慈悲方便などは、一切この中に入ります。

成所作智

最後の成所作智とは、いわゆる日常の五感のはたらきであります。眼では見、耳では聞き、鼻では嗅ぎ、舌では味わい、体では触れ、心では思う、感覚作用でありますが、この智慧は、われわれ凡夫も仏もまったく平等であります。

しかし、この般若心経はもともと、空を分かる智慧を強調する経典でありますから、この四智の中でも特に、大円鏡智と平等性智を大切にいたします。つまり法身仏（ほっしんぶつ）の境地、絶対平等の境地であり、これを文殊（もんじゅ）の

分別の出て来ない先の、白紙のような智慧

根本智と申します。

その智慧は分別の知恵ではなく、相対的な知恵ではなくて、絶対的な智慧、空の分かる智慧、無の分かる智慧である。私どもの分別の出て来ない前の、生まれたままの意識の本体、アともウとも意識の出て来ない先の、ちょうど白紙のような、池の上に波の立たぬ静けさのような、そういった人間の根本智、分別の出て来ない先の智慧。それが般若の智慧であります。

波羅蜜多（はらみた）

向こうの岸に行く

波羅蜜多とは、翻訳すると到彼岸（とうひがん）、向こうの岸に行く、理想の国に行くということであります。

日本では、春秋二回、お彼岸ということがあります。昔から、一年中で一番時節のよい時期の一週間を選んで彼岸会（ひがんえ）が設けられておるのであ

ります。平素はなかなか忙しくて寺参りもできませんが、この時だけは、仕事を休んで寺参りをし、お説教を聞いて、ご先祖さまのお墓を掃除し香華を手向け、坊さんをお迎えして回向供養し、ご馳走を用意して、皆に供養する、こういう功徳法悦の一週間がお彼岸であります。

あこがれの、理想の国

彼岸、彼の岸とは、理想の国であります。日本のような小さな国では、大きな川がありませんから、向こうの岸がいっこう珍しいことはないし、向こうの岸もこっちの岸も同じことですが、インドのガンジス河や中国の揚子江というような大きな河になりますと、向こうの岸が一つのあこがれの世界になるのであります。

こちらは暑くて仕方がないが、向こうの岸に渡ったら涼しい国がありはせんか。こちらでは年中戦争ばかりしておるが、あちらの岸に行ったならば戦争のない国がありはせんか。こちらは泥棒がおり、詐欺があり、火事があったり、いやなことばかりだが、向こうの岸に渡ったならば、

向こうの岸に渡ってみれば、こちらの岸が彼岸になる

そういうことのない平和な国がありはせんか。こちらの国では明けても暮れても税金ばかりとられておるが、向こうの国に行ったなら税金のない国がありはせんか。このように、向こうの岸は一つのあこがれの世界であります。

紀州の南端に行きますと、村をあげてアメリカやカナダやオーストラリアへの入植が盛んで、若い者が海外へ出ておらんような家は一軒もない、というような村があります。それらの人が帰って来てアメリカ村というような村を作っておるところもありますが、あの紀州の南端で、太平洋ばかりを毎日見て育った子供というのは、後（うしろ）のほうにある京都や大阪のことは考えない。向こうの岸に渡ったならば、アメリカやハワイというところがある。何でも物の豊かな暮らしよいところだそうだ。どうしても向こうの国に行かんならん。と、こういう気持ちで育ちますから、大きくなったら皆な向こうへ渡るのであります。

ところが、向こうに渡って歳をとって、日本のほうを見てみると、今度は日本のほうが向こうの岸になっておる。やっぱり向こうの岸が懐かしいと言うて、また帰って来る人がたくさんあるようであります。それならば、もともと生まれた紀州が彼岸であったわけで、何も苦労してアメリカに渡る必要はなかったようなものですが、これも実は、彼の地で死ぬほどの苦労をなされたからこそ、今日の彼岸が分かったわけでありましょう。

理想の国は、現実を離れた世界ではない

彼岸は理想の国であります。しかも天国のように手の届かん世界でもなく、極楽浄土のように死んでから行くところでもなく、お互いが努力さえすれば、何か方法さえ企てれば行ける世界が彼岸なのであります。理想の世界ではあるが、現実を離れた世界ではない。お互いが工夫さえすれば必ず行ける世界が、向こうの岸であります。これが彼岸であります。

その向こうの岸、理想の国に行くという意味が、「波羅蜜多」でありま

す。この言葉も昔から翻訳をされずにハラミッタと言われておりますから、玄奘三蔵も、「波羅蜜多」と残されたものと思います。

そこで、彼岸、向こうの岸が理想の世界といたしますと、お互いのこの現実の世界は此岸、こちらの岸でありますが、こちらの岸は迷いの世界であり、向こうの岸は悟りの世界である。こちらの岸は苦しみの世界であるが、向こうの岸は楽しみの世界である。こちらの岸は悪の世界であるが、向こうの岸は善の世界である。

そういう世界が人類のあこがれなのでありますが、その理想の世界へ行く方法として、仏法では六波羅蜜ということが説かれるのであります。布施波羅蜜、持戒波羅蜜、忍辱波羅蜜、精進波羅蜜、禅定波羅蜜、智慧波羅蜜。これを六波羅蜜と申します。

理想の国を建設する方法としての六波羅蜜

まず、布施は施しをすること。財施、ものをほどこすこと。法施、真理を教え施すこと。無畏施、恐れをとりのぞき、安心を与えることの、

三つが布施であります。持戒は、戒律を守ること。忍辱は、苦難を耐え忍ぶこと。精進は、悪を断って、真実の道を歩むこと。禅定は、坐禅して精神を統一し安定させること。最後に智慧は、般若の智慧を得て、悟りを完成すること。この六つの方法によって、この現実の世界に理想の世界を建設するのであります。

この般若波羅蜜は、六波羅蜜の中でも根本になるものであって、般若の智慧によってお互いがこの現実の苦しい生活のままで、この現実の世界におるままで、彼岸を味わっていく。般若の智慧、お互いが持っておる根本智を悟ることによって、この現実世界をそのまま彼岸にしていく。迷いを転じて悟りとなし、苦を転じて楽となし、苦を抜いて楽を与え、悪をやめて善を修めていく。

お互いの脚下こそが彼岸だ

こういう般若の智慧によって、お互いのこの苦しい暮らしにくい現実の世界を彼岸にしていく。現実がそのまま彼岸だと悟りを開いていく。

彼岸というものは河の向こうにあるのではなくして、実はお互いの脚もとが彼岸であった。向こう側から見るならば、こちら側が彼岸である。お互いの現実をこのままにしておいても、そこに立派な悟りを開くならば、ここが立派な彼岸になる。そう分かることが、「般若波羅蜜多」ということであります。

般若の智慧そのものが彼岸

般若波羅蜜多ということは、般若、つまり智慧の船に乗って行けば、向こうの岸に到着することができるのだ、というふうにいちおう解釈されます。ところが実はそうではなくて、「智慧の彼岸に到る」とよむべきで、智慧そのものが彼岸なのであります。般若の智慧が分かることが、すなわち彼岸に到ったことになるのであります。

心経（しんぎょう）

心経とありますが、この心にも解釈が三通りあります。心というのは

肝心かなめの教え

肝心かなめということ、大切なということだという説。心とは心性、人間の心、精神を言うのだという解釈。心とは精神力、神力、人間離れをした非常に強い精神力だという説。こういう三通りに解釈されておりますが、普通は肝心かなめの、という意味に解釈してよいと思います。

そういたしますと、摩訶般若波羅蜜多心経とは、「大きな智慧の彼岸に到達する肝心な経典」ということになります。なにぶん二百七十二文字という短い経典でありますが、その中に仏教のもっとも肝心な真理が盛られておると思うのであります。

経は縦糸

経は原語ではスートラと言い、貫線のことであります。インドやハワイに行きますと、レイといって花をたくさん繋(つな)いだものを首にかけてくれます。あのレイの花を繋いである中にある糸が貫線、スートラであります。

畳などを見ますと、横を織っていくイグサは始終変わりますが、縦の

古今、未来を貫き永久に変わらぬ真理

現代の糸を織り込まなくては、用をなさない

糸は初めから終いまで貫いておる。この縦糸がスートラであります。反物にしても、横の糸はいろいろと変化して模様を作りますが、縦の糸は、一反の織物の中で初めから終いまで貫いており、変わることがない。これがスートラであります。

三千年の昔も三千年後の今日も、あるいは未来永久に貫いて変わらない真理、それが経ということであります。横の糸は始終変わりますが、縦の糸は変わらない。その変わらない骨となる真理が、このスートラであり、お経というものであります。

しかし、横の糸は始終変わって行かなくてはなりません。仏教はいつまでたっても不変の真理だからといって、三千年前も今日も同じことを言うておったのでは、これはもう死物になってしまう。横にはやはり現代の糸を織り込んでいかなくては用をなさん。

縦の糸があるからといって、縦の糸ばかり自慢をして、畳が破れてお

るのに、横の糸を繕うことを忘れておるのが、現代の仏教ではないか、と反省させられるのであります。縦の糸は永遠に変わらぬ真理ではあるが、そこに現代という横糸を織り込んでいかないと、織物にもならんし、現代の模様にもならんと思うのであります。

そこで、この般若の智慧というものは、私どもが生まれながらにして持っておる智慧であります。一休さんは、

おさな子がしだいしだいに知恵づきて
　仏に遠くなるぞ悲しき

と歌っておられますが、生まれてから私どもはいろいろな知恵をつけられております。「これは何？」「坊やの名前は何て言うの？」と、名前も分からん時分から名前を教えこまれている。般若の世界は時間を超越しておるはずなのに、「坊はいくつ？」と、歳を教えられる。僕はこれで、彼は他人だということを教えられる。これは僕の所有物だから大切

生まれてから覚えた知恵

黒板に書かれた知恵

生まれたままの智慧

黒板にまだ何も書かれていないところ

にしなくてはならないが、あれは人のものだからどうでもいい、ということを教えられる。

いろいろな知恵を教えこまれて、だんだん学校へ行ってさまざま理知分別を覚え、学問をして来たのですが、それは皆な生まれてから覚えた知恵であります。ノートに書き込んだ知恵、黒板に書かれた知恵であります。

生まれたままの智慧というのは、黒板にまだ何も書いてないところ、ノートにイロハのイの字も書いてないところが、お互いの生まれたままの姿であります。その生まれたままの姿を見失ってしまって、そこに書かれたものにすぐにとらわれ、紙の上に書かれた文句にとらわれてしまっておるが、お互いのもっとも大切なのは、この白紙であります。

本来白紙の上に字が書かれたのだ、ということを忘れてしまって、書かれた文字が有り難くなって、もとの根本の、意識の根源そのものを忘

れてしまっておる。生命そのものを忘れてしまっておる。分別と理知の中へ入って、生と死、善と悪、損すると儲ける、我と他人、苦しみと楽しみ、すべてがこの対立の世界へ落ち込んでしまって、身動きのできないほど苦しんでおるのが、私どもの現実世界であります。

しかし、それは生まれてから覚えた知恵、お互いの社会生活に偶然にできて来た知恵でしかない。われわれの根本の智慧は対立の出て来ぬ先が本当の自分の智慧である。こういうことをひとつ考えていただきたいと思うのであります。

根本の智慧は鏡のようなものだ

よく譬えに言われることでありますが、その根本の智慧は鏡のようなものであります。鏡の前に物が来れば、鏡の中に映るが、鏡の中には何もない。物が去れば、消えてしまい鏡の中には何も残らない。その本来何もなく、後に何も残さない心が、健全なお互いの生命、意識というものです。

私どもは毎日新しいものを食べ、新しい空気を吸い、新しい水を飲みます。毎日新しいものを取り入れて、古い不用なものを排泄し、新陳代謝をし、水のごとくに流れていく。その流れていくのが、お互いの血液であり、細胞であり、お互いの肉体でありますが、これは休みなしに流れておる。

それならば、毎日新しいことを考えて、すんだならばいらんことはサッサと流して、後に何も残さないというのが、お互いの健全な意識というものでなくてはならないでしょう。

そこに子供の時分に教えこまれた、「これが私」「これが花子」ということが焼き印のように押しつけられておって、どうしてもそれから離れることができない。寝ておっても、名前を呼ばれればすぐに目を覚ましてしまう。それほどまでに、私どもは自我という、生まれ出てから教えられた意識にこだわってしまって、身動きのできん今日のお互いになっ

滞るものは何もなく、ただサラサラと流れる意識

時間的にも空間的にも、無限の広さを持っている

てしまっておるのであります。

しかし、健全な意識はそういう滞るものが何もなしに、サラサラと流れ、いつも新しい新鮮な意識で日暮らしができることが私どもの健康な意識でなくてはなりません。それが般若の智慧であります。

鏡はどんな小さなものでも、富士山のような大きなものでも映すことができます。何で富士山のようなものが鏡の中に入るのか。何で太平洋が鏡の中に映ってしまうのか。このアズキよりも小さな瞳孔を通して、私どもの意識の中に入る。太平洋が入る。空を見上げるならば、二千万あると言われる星が、皆な私の小さな目の中に入ってしまう。摩訶般若であります。何もかも入れる余地がある。

私どもの意識というものは、空間的には無限の宇宙を抱き込むだけの広さがあり、時間的には人類が発生する前の地球の歴史まで考える。時間的にも空間的にも、無限の広さを持っておるのが、私どもの意識の本

質、本体であります。それが摩訶般若であります。
私どもは今日、生まれてから覚えた知恵で、毎日の日暮らしをし、鼻をつきあわせて、対立の世界に悩んでおります。しかし実は、お互いの根本の意識は、対立を越えた、実に無限の全宇宙を包容するものである。こう悟ることによって、この矛盾だらけの世の中におりながら、しかもその苦しみから解脱をし、そういうこだわりから救われ、自由を得ていく。何ものにもこだわらない、力強い、たくましい意識で生きていくことができる。そう分かることが摩訶般若であります。

全宇宙を包容する意識

大きくして、実に全宇宙をすべて入れる内容であり、しかもすぐれておる。すべてのものを自分の心の中に包容してしまう、こういう大きな摩訶般若の智慧によって、言葉を換えて言うならば、空ということが分かることによって、この苦しい現実がそのまま彼岸になっていくのであります。

第二講

観自在菩薩。 行深般若波羅蜜多時。 照見五蘊皆空。 度一切苦厄。

観自在菩薩は、深般若波羅蜜多を行ずる時、五蘊は皆な空なりと照らし見て、一切の苦厄を度したまう。

自由に真理を観る眼の開けた菩薩は、その深い英智に依って、肉体も精神も、すべて空であると達観して、一切の苦悩災厄から免かれる。

観世音菩薩が説かれたお経

お経というものは、たいていは、「如是我聞、一時仏在」という形式で始まるものです。と言ってもすべてが釈尊みずからがお説きになったものではなく、たいていは後人の創作になるものでありますが、もし釈尊が生きておられたならば、このように説かれたであろうという信念のもとに、こう書かれておるのであります。そこに後の作者の名前を出さずに仏説としているのは、誰が考えても真理とはこうでなくてはならん、これこそが普遍的な真理、すなわち仏説であるという信念でありましょう。

ところで、この般若心経は、大般若経六百巻のエキスだけを抜粋して、わずか二百六十二文字にまとめた経典でありますから、他の経典のように、「如是我聞」というような序文もなかったものと思われます。後世、法月らの翻訳時代になって、やはり如是我聞から始まらぬと具合が悪いということで、「如是我聞。一時仏在王舎城霊鷲山中……」で始まる序文が加えられたようです。それによると、この般若心経は、釈尊が王舎

城の霊鷲山中に百千の弟子たちとともにおられた時に、観世音菩薩が釈尊のお許しを得て、舎利弗を初めとする大衆に説かれたことになっております。

観自在

こういうわけで、この般若心経は、普通のお経と異なって、冒頭に説法をなされた観音菩薩の名前があげられておるのであります。

観音さま、原語ではアバロキテーシュバラと申しますが、鳩摩羅什の訳では観世音、この玄奘三蔵の訳では観自在と訳されておりますが、同じことであります。他にも光世音という訳もあります。仏とは智慧と慈悲だと言われますが、智慧を主体とする時には観自在であり、慈悲という面から見たならば観世音、と理解したら分かりよいかと思います。

観世音は、この世の中の音を観る、世間の人々の苦しむ声、哀しむ声

をすべて聞きとって救われるということで、菩薩の慈悲の面から言われたことになりましょう。世の中の音を聞くのだから、観ではおかしい、聞世音ではないか、と思われるかも知れませんが、観とは、目で見ることではなく、心ではっきりと意識することであります。肉眼で見ることではなく、心眼で見ることであります。

また、観自在と言う時は、般若の智慧によって、「一切の諸法は夢の如く、幻の如く、泡の如く、露の如し」と、すべては空なのだと達観した心境を、観自在と言うのであります。

この般若心経は、般若の智慧を説かれた経典でありますから、観自在と訳し、観音経は慈悲を主体に説かれた経典でありますから、観世音と訳されておるのだと思います。

この観世音菩薩とは、もちろん歴史的な実在人物ではなく、架空の人物であります。キリスト教では神と人間との間にキリストを立てますが、

観音は仏性そのもの、普遍的人格そのもの

説く人も説かれる人も、ともに観音さま

それと同じように、言わば、人間と仏との間にあって、仲介の労をとられる方が、観世音菩薩でありましょう。言うならば、観音さまは、仏性そのものであり、お互いが生まれながらにして持っておる、尊厳なる普遍的な人格そのものであります。

その普遍的な人格である観音さまが、釈尊に代わってこの普遍的な真理である般若心経を説かれておるのであります。そして、お互いは生まれながらにして、この普遍的な人格を具えておるのですから、実は、説く人も観音さまならば、説かれるお互いも、ともに観音さまだったということになりましょう。

まことに仏教とは、人々お互いが、この自分の中に、普遍的なる人格、尊厳にして自由なる価値と権威を持っておるのだと分かることであります。一人ひとりが観世音菩薩であると分からせていただく教えが仏法であります。

菩薩(ぼさつ)

心の優しい人のことを観音さまのようだとか、菩薩のようだと申しますが、こう言いますと、いかにも人間に近い存在のようであります。仏とか如来と言いますと、あまりにも尊くて近寄りがたい感じがします。また羅漢と言いますと、いかにも厳しく、傍に寄れそうもない感じがしますが、菩薩と言うと、いつでも遠慮なしに傍に行って、相談できそうな感じがいたします。

このように、人格が完成された仏でもなく、煩悩を断絶した阿羅漢でもなく、やがては仏になられる方として、仏と羅漢との間に菩薩というものを置かれたことは、大乗仏教の大きな特徴であります。大乗仏教が菩薩仏教、在家仏教と言われるところであります。

大乗仏教は菩薩仏教

仏教というものは、出家し戒律を守る特殊な人々のためだけのもので

あってはなりません。釈尊は、一切の衆生をことごとく救うと言っておられますが、そのまま救われるとは、家庭を持ちながら、職業を持ちながら、社会の生活をしながら、在家のままで、煩悩があるがままで救われるということであります。

多くの菩薩方のお姿を拝見いたしますと、皆な髪を伸ばし、イヤリングやネックレスをしたりしておりますが、これはインド人の風習であり、在家であることを示したものであります。

ただ、この菩薩の中でも、地蔵菩薩だけは例外として、頭を丸められ、出家の姿をしておられます。地蔵菩薩というお方は、言わば地獄の餓鬼畜生などの極悪道の衆生や、あるいは社会の最底辺の貧しい方々を救われるのが本願でありますから、こういう地蔵菩薩の出家清浄の姿を見て、初めて菩提心を発(おこ)すことができるからでありましょう。

菩提心を発せば、誰でもただちに菩薩になれる

初発心時便成正覚(しょほっしんじべんじょうしょうがく)と言われますが、菩提心を発しさえすれば、誰でも

ただちにそのまま菩薩になれるのであります。いや、菩提心そのものが仏心であり、正覚であると言えましょう。「自未得度先度他（じみとくどせんどた）」と道元禅師は示されておりますが、おのれが未だ救われぬさきに、人を救うていこうと誓うことが菩提心であります。自分の幸福は後まわしにしても、まず他の人を幸福にしてあげようと誓うことであります。

そういう誓いをたてた人を菩薩と言うのであります。平和な世界の建設と人類の幸福のために、この一身を捧げようと誓うことは、そのまま仏の誓願と同じものであります。欲望だらけのわれわれ凡夫が、欠点だらけの私どもが、こういう誓願をたてることによって、そのまま菩薩の仲間に入ることができ、仏になれると言うのであります。

これ以上の奇蹟はないではありませんか。

これ以上幸福なことはないではありませんか。

その人その人で立場は異なりますが、人類と社会のために、一生を捧

げるのだという願いを持っていただきたい。そういう願いを持つならば、もう既に目的は達せられたも同じことです。

行(ぎょう)

既に菩提心を発(おこ)したからには、それにふさわしい行(ぎょう)、菩薩の願行がなくてはなりません。

禅は行の宗教と言われますが、ただ能弁に語るよりは、黙々として行ずるところに、禅の風格があります。達磨大師も、「道を知る者は多く、道を行ずる者は少なし」と言われておりますが、仏法は知識だけで理解できるものではありません。知識分別を超えた般若の根本智によって自覚されるものであり、また、黙々と行ずることによって自知体得されるべきものであります。智目行足(ちもくぎょうそく)とも、智行合一(ちぎょうごういつ)とも言いますが、道を知ればおのずからそこに行が伴うはずでありましょう。

道を行ずる者は少なし

また、その行は無行の行であり、無修の修でなければならんでありましょう。観音経には、「観世音菩薩は云何が此の娑婆世界に遊び、云何が衆生の為に説法したまう」とありますし、遊戯三昧とも言うように、衆生済度なさることが遊びであります。私どもが努力し力んでするような行ではなく、観音さまにとっては、それは何でもないお遊びなのです。「終日行じて未だ嘗て行ぜず、終日説いて未だ嘗て説かず」であります。

深般若波羅蜜多時

波羅蜜多は先に出て来たとおりでありますが、ここには深般若波羅蜜多とあります。白隠禅師は、毒語心経で、

咄。好肉を剜って瘡を生ず。怪しい哉、所謂般若とは其れ何為る物ぞや。既に是れ浅深有り、将た其れ河水に似たる者か

と揶揄しておられます。般若の根本智は何もない空、男もなければ女も

ない、浄でもなければ汚でもないのだから、河の水ではあるまいし、浅いの深いのということがあるものか、と。そして、さらに頌を作って、

空を求めて色を破る、之れを浅と言い、色を全うして空を見る、此れを深と曰う

と解決を与えておられます。色、つまり物質を分析して空の理を追求していくのは浅般若である。たとえば自我というものは実はないのであるが、自我を構成している物質はあると見ること、つまり、自我という主観は空であるが、客観の世界は実在するのだ、と見ていくのが浅般若であります。しかし、そのように頭で分析せずに、物があるがままに、そのまま一切が空だと直感できるならば、それを深般若と言うのであると。

われわれ凡夫は、毎日、憎いの可愛いの、損だ得だという分別の世界に日暮らしをしておるのですが、観自在菩薩は、そういう現実の差別の世界を、あるがままに見ながら、しかも分別のない心境で遊びたまうて

いるのであります。

照見五蘊皆空（しょうけんごおんかいくう）

このように深般若波羅蜜多を行じて、妄想執着を払いのけて、般若の智慧が分かり、生まれたままの赤子のような心になるならば、五蘊は皆な空であると照らし見ることができるでありましょう。

五つの集まり

五蘊。蘊というのは、「集まり」という意味で、お互いの肉体と精神は、後のところにも出て来るように、色（しき）、受（じゅ）、想（そう）、行（ぎょう）、識（しき）の五つが集まってできておるのであります。

色は物、肉体

第一の色は、物であり、われわれの肉体のことであります。お互いの体というものは四大と言って、地水火風の四つの元素が集まってできているのだ、というのが仏教の見方であります。まず骨とか髪の毛とか歯というような固いものは地の成分であります。血液や胃液などの体液は

水の成分。また、生きている間は体が温かいが、これは火の成分であります。そして、心臓が動いたり、手足が動いたりするのは風の成分によるのだと言います。このように四大が集まってこの身体を構成しておるので、肉体のことを色蘊とも言うのであります。

お互いの肉体は仮りの姿である

しかし、この四大によって成立しているお互いの肉体も、現実にあるように見えてはおるが、その内容は刻々と一時も休みなく変化しておるのだから、あくまでも仮りの姿。集まるべき因縁がなければ、もとの四大に分散しているだけだ。この肉体は、あるがままに空である、と見ていくのが般若の智慧であります。

感覚も空である

第二の蘊である受は、客観世界を受け入れるという意味で、感覚の集まりのことです。われわれは目でものを見、耳で声を聞き、鼻で香りを嗅ぎ、舌でものを味わい、体で触れていく。そういう感覚があって、初めて人間というものが成立するのであります。しかし、その感覚も、そ

れがはたらいている刹那(せつな)だけで、すんでしまえば何もない。一切の感覚も、あるがままに空である。

判断も空である

第三の想は、判断の集まり。感覚が受ければ、おのずからそこに判断が出て来る。花は紅、柳は緑と判断をし、ワンと鳴けば犬、ニャンと鳴けば猫と、いちいち判断をしていくのであるが、これもその刹那だけのはたらきであって、すんでしまえば何もあとに残るものはない。そのまま空である。

意欲も空である

第四の行は、判断が行為に移ること、意欲というはたらきであります。あれが見たい、これが欲しい、うまいものが食べたいと、まことに人間は欲の集まりでありますが、この欲も満たされてしまえば、あとは何もなくなってしまう。あるように見えてはおるが、実在するものではない、そのまま空である。

第五の識は、阿頼耶識(あらやしき)、翻訳して含蔵識(がんぞうしき)。お互いが生まれてから得た

自我も実在するのではない

経験と知識のすべてを蓄えておる蔵であります。言わば記憶の集まりで、無限の過去からの複雑な記憶の集まりが、いわゆる自我と言われるものであり、われわれの行動と存在を決定していく主体性というものであります。凡夫はこの自我を実在のように思うて、もっぱらそれに執着しているのですが、そもそもそれが罪の始まりであり、迷いの始まりであります。

このように第一の色は肉体で、あとの受想行識は精神ですが、このわれわれの肉体も精神も、実在するものではなく、その五蘊はあるがままに空である、と教えるのが仏教の人間観であります。

度一切苦厄（どいっさいくやく）

四苦八苦

人生は苦である。生老病死の四苦がある。生まれることが苦しい。赤子は皆な泣いて生まれて来る。この世界の風は身を切るように冷たい。

生老病死
愛別離苦
怨憎会苦
求不得苦
五陰盛苦

求めて得られぬ
は、すべて苦しみ

柔らかい布でくるまれても、布が体にさわると岩のように固い。生きる苦しみ、歳をとる苦しみ、病む苦しみ、そして、やがて死という大きな苦しみがおそって来る。そのほかにも愛別離苦、好きな人とも別れなければならん。怨憎会苦、嫌いな人とも一緒に暮らさなくてはならない。求不得苦、求めるものが思うように得られない。五陰盛苦、体があり心があるから、苦しみを受けるのである。四苦八苦の人生である。しかし、その一切の苦も、般若の智慧が分かれば救われると言うのであります。

人間、この肉体と精神があるために、結局苦しむのであります。これはいわゆる五欲の苦しみであります。本能的、生理的な苦しみでありま す。腹が減ると苦しみを感じる。年ごろになると色気が出て来て、苦しみを感じる。疲れると眠くて苦しみを感じる。あるいは、物欲、所有欲が出て苦しみを感じる。あるいは名誉欲が出て苦しみを感じる。求めて得られないのは、すべて苦しみである。その他にも天災地変ということ

天下に求めるもの
が何もないならば

もありますが、それが苦厄であります。

自我があるから、これらの苦しみがついてまわるのですが、自分というもの、自我というものがなくなってしまうならば天下に求めるものは何もない。そう徹するならば、案外、楽なものである。案外、暮らしよいものである。一切の苦しみがなくなる。

生活の苦しみと言いますが、人間、生きるだけだったら、誰でも立派に生きていける。私どもも僧堂でお粥だけをすすっておるが、立派に生きておる。生きるだけだったら、自分さえ捨ててしまうならば、そんなに苦しいものではありませんが、皆さんは社会的な立場を持っておって、「このぐらいのものを食べんと体裁にかかわる。隣の家で魚を買うたから我が家でも買わなくては」というようなところに頭を使って、どうしても動きがとれんから、「こんな暮らしならば、一家心中しようか」ということになるわけです。

生きられなくて死ぬのではない、自分の人間としての立場を捨てきれなくて死ぬのだろうと思う。お粥をすすって、人さまが捨てたものを拾って食っていけば、人間、生きるだけだったら、いくらでも生きていくことはできるはずです。

真実の自己は老いることもない

歳をとるということも、お互いの真性、お互いの本当の精神というもの、真実の自己というものは時間を超越したものだということが分かれば、歳をとるという苦しみもないはずであります。「体は弱りましたが、気だけは若いですよ」とよくおっしゃいますが、私どもが、真実の自分というものは時間を超越し、時間の束縛を受けぬものだと本当に徹底し、自我が空なるものだと分かるならば、老いの苦しみも忘れるはずでありましょう。

病気の苦しみ。本当に病気で苦しんでおることよりも、病に対する気苦労で悩んでおるようなことが、人生にはたくさんあります。白隠和尚

も、「三合の病に八石五斗の物思いなるべし」と言うておられます。病気はたった三合くらいなものであるが、その病気に対する心配は八石五斗ぐらいなものだ。そういうことになりがちです。

あの薬を飲んだらよかろう、この薬を飲んだらよかろうかと、浴びるほど薬を飲んでみたり、次から次へとお医者さんを替えてみたりするから、どうしても病気を重くしていくのでありますが、そういう杞憂を捨ててしまって、自分は空だと分かって、自然のままに休んでおろう、ということになりますと、存外に早く治るものであります。

お医者さんにかかったが治らなかった病気が、新興宗教に入信したら治ったというような話をよく聞きますが、これは新興宗教の力で治ったのではなく、医者や薬に対する迷いから救われたということ、焦燥から救われたということによって病気が治ったのでしょう。

自我は空である、肉体も精神も空である、と徹するならば、病気も楽

に治るものです。死という問題までも、この涅槃の境地、深般若の世界には生死はないのです。「我が這裏(しゃり)に生死無し」だ。死という問題も、お互いの仏性というものが分かれば、そこには死はないのだ。

般若の世界に生死はない

求めるものがなくなれば、苦しみから救われる

本当に自分がなくなれば、求めるものはなくなる。求めるものがあるから人生は苦しくなるのですが、もはや天下に求めるものがないということになったならば、これほど気楽なことはありません。何もいらない。金もいらん、命もいらん、財産もいらん、名誉もいらん、何もいらん。「求むる有るは皆な苦なり」と古人も言っておられますが、自己がなくなるならば、求めるものがないのですから、苦しみから救われる。自分がなくなれば憎いものもなくなるから、救われる。

盤珪さんがよく言われております。

「姑が憎いの嫁が憎いのと、よく言わっしゃるが、姑は憎いものじゃないぞ、嫁は憎いものじゃないぞ。あの時に姑さんはこんなことを言わっ

自分があるから、愛があり憎しみがある

しゃった、この時にはこう言わしゃったという記憶が憎いのじゃろうが。私が病気をしたけれども、嫁はいっこうに看てくれんかった、嫁のくせにこんな仕打ちをした、と思うその記憶が憎いのじゃろう。皆な記憶を捨ててしまって、きれいな心で姑さんを見、嫁を見ていけば、嫁は憎いもんじゃないぞ、姑は憎いもんじゃないぞ」

と、盤珪さんは言うてござる。自分があるから愛があり憎しみがあるのでありますが、自分を捨ててしまえば憎いものもなければ、特別に愛着せんならんものもない。自分がなければ、本能の苦しみに悩まされることもない。自分がなくなって、いろいろな杞憂や焦燥感がなくなれば、この世の中に苦しみというものはなくなるのであります。

その自分がなくなって、自分に対する苦しみがなくなったところで、初めて「観世音」であります。世の中の音がありのままに聞こえて来るのです。自分を忘れて、自分の苦しみを忘れて、世の中のため、人のた

めにはたらいていくのが観世音菩薩であります。

自分の苦しみを忘れ、人のためにはたらく

般若波羅蜜多を修行し、三昧を修行すると、自分というものは空になるから、そこで自由自在に社会のため人のために、はたらいていくことができる。そこで、菩薩と名づけられるのであります。人のためにはたらくことが一番幸福である、世の中のためにさせていただくことが、一番喜びである。こういうことになったら、このくらい人生の幸せはないであリましょう。そうなっていくのが、人生の最後の目的でありましょう。

人生最後の目的

こう簡単にかたづけますと、今の社会の人たちは、

「そりゃ、坊さんは広いお寺に暮らしておって、家賃も出さずに托鉢して食っておるんだから、何も苦しみはないだろう。だが、この社会はそんな呑気なものじゃない。人生というものはそんななまやさしいもんじゃないぞ」

苦しみのない世界は、この現実の外にあるのではない

と言われるでありましょうが、その苦しみを逃れた世界というものは、

苦しみになりきる

この現実の外にあるのではない。現実の中に取り込むことによって、その三昧ということが得られるのであります。現実を超越した三昧もありますが、現実の中に取り込んで、そこで三昧を味わっていくこともできる。

苦しい時には苦しみになりきっていくと、その苦しみが案外と苦しみではなくなっていくものです。病気をして苦しい時に、ウンウンとうなっておりますが、あんな大きな声でうなるから、さぞかし苦しいのであろうと思いますが、あのうなり声をあげると、病人は楽になる。苦しさになりきっていくと、そこで苦しさを離れることができるのであります。

碧巌録にある話であります。ある僧が、洞山和尚のところに行って、

「寒暑到来す、如何か回避せん——えらい暑くなりましたが、暑さをよける方法はありませんか」

と尋ねたら、洞山が、

「何ぞ無寒暑の処に向かって去らざる——暑さも寒さもないところへ行っ

如何なるか是れ無寒暑の処

たらよかろう」
と答えた。まア、そんな重宝なところがあれば結構であります。そこでさらに尋ねる。
「如何なるか是れ無寒暑の処——暑くも寒くもないところとはどこでございますか」
近ごろならば映画館がいいでしょう、夏は冷房がしてあり、冬は暖房がしてある。ああいうところがいいか知れぬ。暑さも寒さも超越したところとは、どういうところですか、と尋ねると、洞山が答えて言われるのに、
「寒時には闍黎を寒殺し、熱時には闍黎を熱殺せよ——寒い時には、寒さに負けておってはいかん、素っ裸になって薪割りでもやれ。暑い時には、暑さに負けておってはいかん、熱いすき焼でも食って、外へ飛び出して野球でもやれ」
暑い時には暑さに負けずに、暑さを使っていく、寒い時には寒さに負け

悩みに徹していくことにより、悩みが解消する

ずに、その寒さを使っていく。

「寒時には闍黎を寒殺し、熱時には闍黎を熱殺す」。暑い時にはその暑さの中に飛び込んで、自己を殺してしまう、寒さそのものになりきって、自己を殺してしまう。それが、無寒暑の処である。

こう洞山和尚は示されておられますが、私どものこの救われない人生苦も、般若波羅蜜多の三昧の境地になれば、一切、自己というものがなくなるから、そこで解脱をすることができるのであります。それで解脱ができなければ、苦しみの中になりきっていく、苦しみに徹していく、悩みに徹していく。そうすると、そこに悩みの解消される世界が現われて来るのであります。

人生にはいろいろな悩みがありますが、ことに道徳的な悩み、倫理的な悩み、罪の悩み、こういう悩みが宗教的な大きな悩みであります。キリスト教の人や浄土門の人たちは、この罪ということをやかましく言わ

はからい、分別を捨てて、おまかせをする

れるのでありますが、この罪の悩みというものも、いわゆるはからいを捨てて、分別を捨てて、あなたにおまかせをするという、無心の境地になるならば、罪があるがままで、それが苦にならなくなるのであります。
ちょうど芸術も同じことでありましょう。九条武子夫人や柳原白蓮女史というような方は、若い時に家庭的な苦悶が非常にあったのですが、ああいう人は、和歌に託して歌を詠むことによって、苦しみがなごやかに解消されておる。自分の苦しい立場が、歌を歌っていると、何かスッとして来る。苦しみがなくなったわけではなく、苦しみは現実にあるのでありますが、その苦しみを客観的に眺めて、無心にありのままに歌っていると、苦しみが一つの芸術と化して、苦しみではなくなる。
こういうことが言えると思うのであります。外国の小説などは、ずいぶん人間の心理を描写し、人間の悪を描写しておりますが、ああいう描写も、自分の心理状態を書いていくのに、無心な空虚な気持ちで悪を書

くならば、その悪も悪ではなくなる。それが一つの立派な芸術的な作品になっていく。

悩みがあるがままで救われる

自我は空である、自分というものは空であると徹して、このどうにもならん人生社会を眺めていくと、どうにもならんがままで救われておる。苦しいままで救われておる。悩みのあるがままで救われておる。身動きのできん悩みのままで、そこに救われておる。そういう境地を発見することができると思うのであります。

観自在菩薩という菩薩は、要するに自分を忘れ世界を忘れるというところに、お互いの自由な心のあり場所を発見する菩薩でありますから、これを観自在菩薩と言うのであります。

心も体も忘れて、なりきるならば

坐禅や念仏にかぎりません。謡（うたい）をなさっても踊（おどり）をなさっても、尺八を吹いても、自分を忘れて謡をし、踊を踊り、尺八を吹くならば、そこに幸福がある。自分の心も体も忘れて、尺八の音色そのものになりきって

いけるということが、三昧であり深般若であります。自分の指を忘れてピアノを弾く、体を忘れて野球になりきり、相撲に夢中になる。そういうところに人間は幸福を感じていくものでありますが、その自分の体も精神も忘れた時が、人間は一番幸福な時であって、苦しみのない時であります。

観自在菩薩はその深般若を行ずることによって、この自分の精神と肉体とが空であるということに徹して、人生の苦しみを離れて、そこにわびの世界、さびの世界、実に静かな涅槃寂静の楽しみの世界を味わっていくことができるのであります。自分の心がいつも落ち着いて、なごやかで楽しんでおれるから、世の中のために喜んで奉仕していくことができるのであります。

観自在菩薩とは、他人のことではない

これが観自在菩薩であり、観世音菩薩でありますが、これは何も他人のことではない、皆さん方ご自身のことだとご承知を願いたいのであります。

第三講

舎利子。色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識。亦復如是。

舎利子(しゃりし)よ。色(しき)は空(くう)に異ならず、空は色に異ならず。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色。受想行識(じゅそうぎょうしき)も、亦復(ま)た是(かく)の如し。

舎利弗よ。肉体は空を離れては無い、空は肉体を離れては無い。肉体はそのまま空であり、空はそのまま肉体である。感覚も想念も意欲も、或は自我という精神組織も、みなその通りである。

舎利子（しゃりし）

対告衆

われわれ一人ひとりに対する呼びかけ

なかなか聞き慣れん難しい言葉ですから、何かゴツゴツとして分かりにくいことのように思われます。初めに舎利子とあるのは、人の名前であります。観世音菩薩が、たくさんの聴衆の中から代表者を一人呼び出して、親しく話しかけられておられるのです。これを対告衆（たいごうしゅ）と言い、話し相手の代表者であります。

善導大師の阿弥陀経の講釈の中にも、「仏、舎利弗（しゃりほつ）に告ぐというは一切衆生に告ぐるなり――釈尊が舎利弗に告げるとお経に書いてあるのは、それは舎利弗一人に告げられるのではなくして、一切衆生に告げられるのである」とあります。今日の末法の世のわれわれ一人ひとりにも呼びかけて下さるのでありますが、その代表者が舎利子であります。

舎利子は舎利弗とも言い、釈尊のお弟子の名前であります。原語では

シャーリプトラ。プトラは音訳すると弗、意訳すると子ですから、舎利子でも舎利弗でも同じことであります。
　舎利というのは、鷺の一種で、目の非常にきれいな鳥だそうです。このシャーリプトラのお母さんが非常に澄んだきれいな目をした賢い人で、ちょうど舎利のような目をしておるというので、舎利さんと呼ばれておった。その人から生まれた子供であるから、舎利子と呼ばれることになったわけです。

智慧第一の舎利弗

　釈尊のお弟子には頭陀第一の迦葉尊者、持戒第一の優波離尊者、神通第一の目連尊者というように十大弟子がありますが、この十人のお弟子の中で智慧第一、智慧についてはこの舎利弗の右に出るものがないと言われたくらい立派なお弟子であります。三千世界の衆生の智慧を集めても、舎利弗の智慧の十六分の一しかない、と言われるほどでした。八つの時に、もうマガダ国の哲学者を全部言い負かしてしまい、十六の時に

は、もう二百五十人のお弟子があったと言われるほど賢い人であります。

この舎利弗の友達に目連尊者という人があります。この人ももと仏弟子ではなく、他の宗教をやっておった人であります。ところが、釈尊が成道された二年目のこと、竹林精舎の傍のナーランダという町に舎利弗がいて、ある時、道を歩いておると向こうから一人の仏弟子がやって来ました。馬勝比丘、原語で阿説旨と申す人でありますが、お釈迦さまが成道されて二年目でありますから、まだそんなにたくさん弟子はありません。釈尊が初めて済度された五人の比丘の中の一人ですが、その馬勝比丘が向こうからやって来る姿を舎利弗が一目見て、大変に感激した。

お経には、「顔色和悦、諸根寂定、衣服斉整、地を視て行く」と書いてあります。顔色和悦、いかにも穏やかな、血色のいい、喜びに満ちた顔をしておる。中宮寺の如意輪観音のごとき、永遠のほほ笑みをたたえたような顔をしておる。いかにも和やかな、いかにも法悦に満ちた、愁

いのない、血色のいい、実に素直な顔をしておる。諸根寂定。諸根は六根のこと。この男の姿を見ておると、実に目が静かである。別に何を見ようというキョロキョロしたところが何もない。耳も静かだ。ゆったりとして、騒がしいところが少しもその姿にない。衣服斉整。着ておる着物、袈裟はいかにも粗末なものであるが、よく洗濯の行き届いた折り目の正しいキチッとしたものを着ておる。しかも地を視て行く。キョロキョロ脇目をせずにじっと一間先の地面を眺めて、真っ直ぐに歩いて来る。

一方の宗教の大将をしておった舎利弗が、この一人の比丘の姿を見るとすっかり感激してしまった。素晴らしく立派な、美しい姿だと、思わず傍に寄って、

「あなたはどなたのお弟子ですか。いったい、どんな修行をしたらあなたのような静かな、そういう穏やかな喜びに満ちた姿になれるのですか」

と尋ねますと、馬勝比丘が、はばかることなく、

「私は釈迦牟尼の弟子だ」
と答えました。舎利弗はまだ釈迦牟尼の名前を知りませんから、
「釈迦牟尼とは、いったいどういう方ですか」
とかさねて尋ねると、馬勝比丘は釈迦牟尼のことを話し、その教えを示してやります。
「法は縁に従って生じ、亦た縁に従って滅す、一切諸法は、空にして主有ること無し――この世の中の森羅万象は因縁という法によって動いていくのであり、一切は因縁によって動いていくのである。その因縁ということを釈迦牟尼はお説きになるのである」

諸法は因縁より生ずる

今日、因縁という言葉は、あまりに耳に慣れておりまして、日本人で因縁という言葉を知らん人はないほど日本語に化しております。「因縁だと思ってあきらめよ」とか、「今日は結構な良縁によって結婚式が結ばれます」とか、因縁ということを始終使うのですが、舎利弗はその時に因

この世は神が創ったのではない、ただ因縁の法によるのだ

縁という言葉を聞いて非常に驚いた。

この世界にたくさん宗教はあるけれども、どんな宗教でも、この世界は神さまが創ったと教えない宗教はこの世界にはない。しかるにこの世界は神が創ったのではない、因縁の法によってこの世界はできて来るのだと。

実にこれを聞いて舎利弗は驚いた。神を否定しておる。この世の中は神が創って、今日も神が支配しておられる。死んだら神の裁きを受ける。これが普通、宗教の常道であるのに、釈迦牟尼はそういうことは言われない。この世の中を支配するものは何もない。支配されるものも何もない。この世の中の一切森羅万象はことごとく、因縁の法によって動いていくのである。その因縁ということを釈迦牟尼はお説きになるのだ。

まさしく科学的なものの見方でありますが、智慧第一と言われたほど賢い舎利弗も、こういう新しい説は初めて聞いた。世界始まって以来そ

ういうことを説いた人は初めてだ。この世の中は神が創ったとか、あるいは運命によって支配されるとか、あるいは単なる自然だとか、いろいろな説明の仕方はあるが、この世の中は神が創ったのでもなく、単なる自然でもなく、偶然でもなく運命でもなく、はっきりとした因縁因果の法則によって動いていくのだと。そういう説を聞かせてもらうのは今日が初めてだ。

しかもこの世の中は一切因縁によって動いていくのであるから、そこには自我というものはないのだ。我というものはないのだ。我というものがあると思うのは、因縁によって仮りに我という姿がそこに現われているだけである。その仮りに現われている我は、毎日動いていく、変化をしていく我である。そこに絶対動かない自我というものはないのだ。こう自分は悟ったのであると馬勝比丘に聞かされて、大いに感じさせられたのであります。

われわれは、自我があると思うから、そこに自我に対する執着がある。自分をよいものにしようという努力があり、人に負けまいとする争いの心があり、ねたみの心がある。この世の中の多くの平和を乱すものは、皆この自我があるからだ。罪を作ればその罪に執着し、裁かれる自己に執着し、神の前に出ても裁かれる自我を持っておる。そこに人間の救われない悩みがある。しかし、自分というものはないものであると徹底するならば、この比丘のような穏やかな、平和な、和やかな気持ちになれるのだ。

こう悟って、舎利弗はただちに二百五十人の自分の弟子をつれて、さらに友達の目連に勧めて、目連も二百五十人の弟子を連れて、そうして二人がともに釈尊の弟子になったのであります。そこで釈尊の教団は、成道第二年目にいっぺんに五百人の弟子が増えたことになったわけであります。

舎利弗、仏弟子となる

そういう因縁で釈尊の弟子になり、やがて十大弟子の一人と言われたのがこの舎利子、舎利弗という人でありますが、この智慧第一の舎利弗を大衆の中から呼び出して、親しく説法をされたのであります。

色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。

色は空に異ならず、空は色に異ならず。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色。受想行識も、亦復た是の如し。

前のところにも五蘊皆空とありましたが、五蘊は、色受想行識の五つであります。初めの色は肉体のことであります。柳原白蓮女史のお若いころの歌に、

　仏者がいう色即是空のことわりや
　　女のまえにつれなのことや

というのがありますが、これは、色をご婦人のオイロケに解釈しておら

れるのであります。そうとることもありますが、いささか曲解でありましょう。

受は感覚。外の外界を受け入れるのであるから感覚である。想というのは感覚で受け入れたことに判断を下していくこと。行はそこに自分の意欲をはたらかせていくこと。そして、そのはたらいていく根本になる意識が自我であります。最後の識は自我であります。身体があって感覚があって、判断があって意欲があって、その奥に自我がある。初めの色は肉体で、後の受想行識はすべて精神作用であります。

つまり、肉体と精神とを集めたものが五蘊、つまり私どもという人間であります。その中の初めの色をまず代表的に初めに出して、色が空であることをはっきりさせられるわけであります。色と空との関係をはっきりさせて、受想行識もいちいち説明はしないが、そのとおりだと述べられておるのであります。

身体は因縁によってできたもの

色は空に異ならず。肉体や物はすべて空であると。般若心経では、諸法は因縁によって生じたものであるから、そこに自性はない、自性がないから去来がない、去来がないから畢竟(ひっきょう)空であると、こういう説明がしてありますが、すべての存在、物は因縁によってできたものである、私どもの身体は因縁によってできたものである、と言うのであります。

まず今日の学問で申しますならば、母親の卵子の中に父親の精子が入って、そこで一個の生命というものができあがりますが、仏法のほうではこれを識と申します。それはたった一つの細胞でありますが、そこに既に個人というものの原因がちゃんとできあがっておる。

これは物と名づけてよいのか、心と名づけてよいのか。物というにしてはあまりに単細胞である。しかもその単細胞の中に、絵を描くことが上手になる才能も含まれておれば、あるいは政治家になる才能も含まれておれば、科学者になるはたらきのできる精神も含まれておるのだから、

物というにしてはあまりに精神的なものである。しかし精神というにしては、何もないのではない、そこに細胞というものがあるのであるから、物に違いない。物とも心とも分けることのできんような単細胞が一つできあがる。それが因であります。

根本の因にもろもろの縁が加わる

父のほうを主体とすれば、父の精子が因になり母の卵子が縁になって、そこに個体ができあがる。こうも考えられましょう。あるいは個体ができあがったところが因で、それが母親の胎内で育まれて、だんだんその縁によって、細胞が分裂して大きくなって来るとも考えられましょう。とにかく根本の因があって、それにいろいろな縁が加わり、いわゆる地水火風、あらゆる元素が加わって、今日のお互いの個体、個人ができあがって来る。そういう因縁によってできあがって来るのであります。

そして毎日ご飯をいただき、水を飲み、呼吸をして空気を吸い、始終物を入れていかなければ生きていけないお互いであります。お米の縁、

この体は地水火風から成る

水の縁、芋や大根の縁、空気の縁、あらゆる縁によって今日の生命が維持されておるわけであります。私どもの身体は、昔の言葉で言えば地水火風、今日の科学で言うなら百いくつの元素が出入りをして、とにかくこの個体が毎日維持されておる。いろいろな力が加わって維持されておるのであります。

だから私どもの身体というものは、いろいろなものの集まりであって、そこに自我はないのだ。私の身体を構成しておるものは水が大部分でありましょうが、その水は皆さんの身体を作っておる水と決して別物ではない。なぜ、私の身体に入った時には、その水が私になるのか。井戸の水を飲めば、なぜその水が私になるか。そんなことはないはずだ。私の中の大部分の水は私ではないはずだ。宇宙の元素だ。他の元素もことごとく、いつでも宇宙に還元されるものである。宇宙の元素が因縁で集まって私の身体ができておるのだから、この身体を私だということはできな

いのではないか。誰の身体も同じではないか。この身体の中に自我はないのではないか。

こう考えて来ますと、「諸法は因縁によって生ずるが所以(ゆえ)に自性なし」と、この身体には自我というものはないはずである。すべて宇宙の元素だ。私の身体も地水火風、皆さんの身体も地水火風。これは平等であり、同じものだ。同じ元素からできておる。「天地、我れと同根、万物、我れと一体」である。

因縁が尽きれば、宇宙に帰っていく

因縁によって集まったものだから、因縁が尽きればこの身体が分散して、もとの宇宙の元素に帰るだけである。因縁が尽きなくても、毎日新陳代謝をして宇宙に返し、新しい元素を入れていくのである。毎日動いていく自己である。因縁によって毎日動いていく自己であるから、そこに決まった自我というものはないのだ。だからこれは空だ。こういちおう説明されるわけであります。

引き寄せて結べば草の庵にて
　解くればもとの野原なりけり

と古人はうたっております。一軒の家でも、敷居やら柱やら棟木やら材木やら瓦やら壁土やら、いろいろなものが因縁によって集まって、仮りにこの家というものができておるのであるから、この家という姿は仮りの姿である。私がここの家でございますなぞという自我は、この家にはないはずである。こう見ていくのが空ということであります。

分析的にはそう説明をされるのでありますが、そう説明してみたところで、何か割り切れん理屈に終わりやすいのであります。

初めのところでお話しいたしましたように、深般若波羅蜜多を行ずる時、五蘊は皆な空であると照らし見る。修行をするということは坐禅をするということでありますが、坐禅をすると身体が空になる。皆さんが坐禅をしてしばらく坐っておられると身体は空になる。坐禅をせんでも

自分の体のあることを忘れる

意識に上らないから、身体がりっぱにはたらくのだ

皆さんそうやって話を聞いていらっしゃる時には、身体はあってもないと同じことでありましょう。空である。背中のあることも、心臓や肺のあることも、胃や腸のあることも意識しない。身体のあることを意識せずに、そこに聞いておって下さる。身体は空に異ならずだ。この暑いのに野球を見て、気違いのようになって応援している人たちは、熱狂してしまって自分の身体は忘れておる。身体は空に異ならずだ。夢中になって野球をやっておる選手たちも自分の身体は忘れておる。

こう体験的に考えていただくほうが理屈抜きにしてよく分かると思います。心臓や肺は、あってもないに同じことだ。意識に上らん。心臓や肺のあることをいつも意識しておいでになる方は、これは病人である。心臓や肺の悪い人だ。胃のあることを意識して坐っておられる方は胃の悪い方だ。それでなかったらお腹のすいた方だ。皆、胃のあることも心臓のあることも、肺のあることも、身体のあることも忘れて、毎日日暮

らしができるのであるから、身体は空に異ならずだ。
ピアノを演奏する名人は指を意識しないと申しますが、自分の指をいちいち意識しておるようなことでは立派な演奏家にはなれん。尺八を吹く時には自分の身体のあることを忘れ、指を忘れ、尺八のあることさえ忘れて一曲の曲になりきっていく。身体はあってもないに異ならない。
それなら身体はぜんぜんないかというと、そんなことはない。空は色に異ならず。身体を忘れておる。空である。しかし、胃は休みなしにはたらいておるし、ご心配はない、忘れておっても心臓は立派に血液を運んでおる。空は色に異ならず。身体を忘れておることは身体があることだ。名優が舞台で芸をやる時には自分の身体を忘れて、その芸になりきっておる。身体はあっても空に異ならん。それならないかというと、ないどころではない。その意識に上らないからその身体が立派な芸をやっていくのであるから、空は色に異ならない。

私どもの身体が自分の意識に上らないということが一番健康なことであり、それが正しい生き方である。道を歩いておってもいちいち自分の身体を意識しておったら大変なことだ。仕事をしておってもいちいち自分の身体を意識しておったら仕事の能率は上がらん。仕事をしておる時には身体はあって忘れておれるところに仕事ができていくのだ。身体は空に異ならず。空は色に異ならず。

空とは、何もない虚無ではない

空ということは何もないことではなくして、空という状態はそのまま健全な身体があることだ。色は即ち是れ空なり。空は即ち是れ色なり。身体のあるままがそのまま空だ。五体のあるままがそのまま空だ。空であるということはそのまま身体があることである。そこから、私どものとらわれのない自由な健康な生活が出て来ると思うのであります。

空だからこそ、何でも受け入れていける

受想行識（じゅそうぎょうしき）。亦復如是（やくぶにょぜ）

受想行識も、亦（ま）復た是（かく）の如し。私どもは目でいろいろなものを見ますが、次から次へいろいろなものを見ていくのに、いくらでも見ていける。次から次へものが目に入って来る。これは目が空だからだ。目の中に何かがあったら次のものは見えないはずだ。見たものが目の中に残っておったら次のものは見えないはずだ。松の木を見て、その次に樫の木を見て、それから泰山木を見て、紅葉を見て、次から次に見ていけるのは、先にあるものがサッサと空になっていくから、次から次へ見ていけるのだ。感覚は空に異ならず。後へ何も残らない。残らないということは、次から次へ見ていけることであるから、感覚は色に異ならない。何も残らないということは、次から次へものが見ていけることだ。

音でもそうだ。いくらでも聞こえる。話も聞こえるが、道を走ってお

る自動車の音も聞こえる。一度にいくつも音が聞こえる。ボールの音も聞こえる。耳の中は空であるからいくらでも音が一緒に入って来る。空であるということはそのまま感覚があることである。机に向かった時にはカチカチと時計の音がするが、本を読みだすと時計の音が聞こえなくなって来る。これも空である。聞いておるに違いない、耳には届いておるに違いないが、あってもちょっとも意識に上って来ない。これも空である。感覚は空に異ならず、空は感覚に異ならずだ。

想もそうである。私どもはいろいろな判断を下し、次から次へいろんなことを考えていきますが、次から次へものを考えるということは、心の中が空だからである。思いごとも空だから、次から次へ何でも考えられる。空だということは何でも考えられることであり、考えていくということは空である。

意欲もそうである。あれが欲しい、これが欲しいと、いろいろにはた

らきますが、それはそのまま空である。
啄木の歌にこういうのがあります。

　考えれば
　ほんとに欲（ほ）しと思うこと有るようで無し
　煙管（きせる）をみがく

たまの日曜日で家にゴロゴロしていると、次から次へと欲しいものが頭に浮かんで来る。しかし、よく考えてみると、どれもこれも、どうでもいいものばかりのようだ。結局、暇つぶしにキセルでもみがくのが落ちだと。まことにわれわれの欲望というものは、あるようで実はないものであり、ないようであっても、いくらでもあり、尽きないもののようであります。行、われわれの意欲もまた空ということになるでありましょう。
最後の識は、阿頼耶識（あらやしき）と言われる心であり、含蔵識（がんぞうしき）とも呼ばれております。知識と経験とを貯える蔵であります。こういう記憶と経験との集

自我は、所在不明の記憶と経験の集合である

まりが、いわゆる自我と名づけられるものであります。すると、この自我も実は、所在不明の記憶と経験の集合でありますから、あっても実はないに等しいものであり、ないかと思うとあるものなのです。

これを総括して、「受想行識も、亦復た是の如し」と簡潔に示されておるのであります。

第四講

舎利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不浄。不増不減。是故空中。無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色声香味触法。無眼界。乃至無意識界。

舎利子よ。是の諸法は空相にして、生ぜず、滅せず、垢れず、浄からず、増さず、減らず。是の故に空中には、色も無く、受、想、行、識も無く、眼、耳、鼻、舌、身、意も無く、色、声、香、味、触、法も無く、眼界も無く、乃至、意識界も無し。

舎利弗よ。すべては空であるから、生ずることも無ければ、滅することも無い。垢れもしなければ、奇麗にもならない。増えもせねば減りもせん。だから空の中には、肉体も無く、感覚も想念も意欲も自我も無い。眼も無く耳も無く鼻も無く舌も無く躰も意も無い。色も無く声も無く香も無く味も無く触れられるものも無く、想われるものも無い。曾て見た世界も無ければ、曾て想うた世界も無い。

すべての現象はそのまま絶対である

舎利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不浄。不増不減。

観世音菩薩が、また舎利子と呼びかけられて、法話が続きます。

ここに諸法とあるのは、色受想行識の五蘊であり、眼耳鼻舌身意の六根であり、色声香味触法の六境であり、合わせて十二入であり、さらには眼界から意識界までの十八界と、すべてをひっくるめて言うのであります。つまり、法は森羅万象、一切の存在のこと、つまり現実の差別の現象のすべてであります。空は言葉を換えるならば、絶対であり、永遠であり、実存ということであります。そこで、一切の現実世界の現象的差別の存在は、そのまま絶対であり実存であって、その一つひとつが不生不滅、不垢不浄、不増不減であると示されるのであります。

盤珪禅師は、ここのところを次のように示しておられます。

「人間の本性というものは本来、鏡のように清浄なものじゃ。鏡の中には

人間の本性は鏡のように清浄なものである

何もない。物が前に来れば映るし、物が去れば消えるだけだ。しかも後には何も残りはせん。物が映ったからといって、鏡の中に生じたものは何もないし、去ったからといって、鏡の中に滅したものは何もない。これを、『生ぜず滅せず』と言う。きたない犬の糞を映したからといって、鏡の中は汚れはせん。きれいな花を映したからといって、鏡の中はきれいにはならん。これを、『垢れず浄からず』と言う。鏡の中に物が映ったからといって、鏡の目方は増えやせん。物が去ったからといって、鏡の目方は減りはせん。これを、『増さず減らさず』と言う。般若心経に不生不滅、不垢不浄、不増不減とあるのは、まったくこの鏡のように清浄無垢な人間の本性をうたわれたものじゃ」

盤珪禅師ほど、仏法を分かりやすく説明なされた方は珍しいと思います。般若の空を、心空つまり心清浄の意味に解釈されておるのであります。

鏡の中には何もないのだから、生ずるものもなければ滅するものもな

い。汚れもしなければ、きれいにもならん。増えもしなければ減りもせん。そういうきれいな心がお互いの本心だと分かることが禅であります。心は何もないのだから、心の中に生ずるものもなければ、減するものもない、汚れることもなければ、きれいにもならん。増えもせん、減りもせん、そういうきれいな心が本心だと分かることが悟りであり、それが般若の智慧であります。

その本心が分かることが般若の智慧

本来何もない鏡のような般若の智慧が、お互いの本心だと分かるならば、生まれたでもない、死ぬでもない。永遠なる生命を自覚するとは、そのことだ。それなら何もないかというと、その何もないやつが自由自在にはたらいていくのであります。

人間というものは、誰でも長生きをしたいものであります。長生きほど結構なことはありません。しかし、いくら生きても何百歳までも生きることはできません。いくら長生きをしても、いつかは滅び、死んでい

かなくてはなりません。しかし、お互いの本性は、生まれもしなければ死にもしないものだと分かることは、長生きをするより以上に結構なことではありませんか。

人間は、もともと罪深いものであります。親鸞聖人も、「罪悪深重（ざいあくじんじゅう）の凡夫」と言われております。しかし、罪をつぐない心を浄めたいのが、人間の真心であり、そこに宗教というものが求められるのでありますが、そのお互いの本性は、もとより垢れもせず浄める必要もないものだと、そう分かるならば、何と素晴らしいことではありませんか。

人間は誰でも、財産が増え、知識や権力が増えることを望むものであります。しかし、生まれたものは必ず死に、増えたものも必ず減る時のあるのが、この世のさだめであります。しかし、お互いのこの本性だけは、増えることもなく減ることもないのであります。そういう永遠なものがお互いの本性だと分かることは、何と素晴らしいことではありませ

んか。
このように、お互いの本性が本来、空相であり、不生不滅、不垢不浄、不増不減なるものだと分かることを心空観と言います。この心空という悟りの眼で、この世の中の一切の森羅万象を見るならば、一切があるがままに、そのまま空だと分かるのであります。これを法空観と言います。
しかし、こう言いますと、「そんなことはない、一切の存在は生じてやがては滅びていくものであり、汚かったりきれいであったり、増えたり減ったりするのは現象にすぎないではないか」と言われるかも知れませんが、そう見るのは平凡な常識であります。それは時間と空間の中における存在として、分別理知でものを見るからであります。時間も空間も超越して、ものそのものを直感するならば、すべては不生不滅、不垢不浄、不増不減であります。

時空を超越して、ものを直感する

是故空中（ぜこくうちゅう）

空とは心空のこと

仏教というものは大変難しいことのようで、哲学のようでもありますが、要するに色と空との二つが大きな要素であります。色と空との二つが分かれば、仏教が分かったと言ってもいいのではないかと思います。

色は物の世界であります。空は、心空の意味で、何もない虚無ということではありません。心だけと言えば語弊がありますが、何も思わん心、中に何もない鏡のような境地であります。子供のような心、無心であり、無念無想であります。

私どもが生まれたばかりの時には、何も意識を起こさなかった。その一念の意識も起こさなかった心の状態が、本当の健康な心の状態だ。台風一過して青空が出て、雲が一つもないというようなスカッとした姿が何か世界の本当の姿のような気がいたします。雨も降らず、風もなく、

雲もなく、日本晴れと申しますが、スカッとして一点の雲のない青空のような姿が、この自然の世界の本当の姿だ。

何も心に起こらない時、その一念の念も起こらない所、赤ん坊のような無心な心、そういった私どもの心の本来の姿を仮りに空と名づけたらどうかと思うのであります。

空とは、一念も起こらぬ無心の世界

あさみどり澄みわたりたる大空の
　広きをおのが心ともがな

という明治天皇の御製もありましたが、そういう秋空の晴れたような気持ちが、私どもに一番快適な気持ちであるし、そういう気持ちを私どもは求めておるのであります。そういう境地が私どもの本当の心の姿であります。そういう心のふるさとを私どもは求めておるわけです。

このごろ、朝日新聞に、京マチ子という女優が奈良の仏さんを見に行ったという話題が出ておりました。奈良の中宮寺の如意輪観音を見て、「世

空とは、永遠のほほ笑みをたたえられる心

界一の美人だ、私よりも美人だ」と言ったそうであります。亀井勝一郎という評論家も折紙をつけておる仏さんで、智慧と愛の象徴であるとも言われ、永遠のほほ笑みをたたえた美しい仏さんであります。

空ということは何もないということではなくして、この観音さんのように永遠のほほ笑みをたたえておられる心の状態が、空というものだろうと思うのであります。

あの奈良の観音さんは、仏教徒であるとないとにかかわらず、宗教の分かると分からないとにかかわらず、また日本人であると外国人であるとにかかわらず、あの半ば開けるがごとく半ばつぶるがごとく動かない目が、人の心を引きつけて離さないと言われております。その魅力は、私どもの心のふるさとがあそこに象徴されておるからであります。

そういう永遠のほほ笑みをたたえておりたい心、それが人間の最後の欲求でありましょう。そういう永遠のほほ笑みをたたえておられる心の

自由な、とらわれのない心

空の世界と色の世界を調和させる

状態はどういう状態であるか。それは空という状態であります。はたらいておって自分の身体を忘れておれる、それが空である。ピアノのキーをたたいて指を忘れておれる状態が空である。歌を歌って自分を忘れておれる、聴衆を忘れておれる、ただ歌だけになれる境地が空である。そういった、実に自由な、とらわれのないこだわりのない、広々として障りのない心、それが空というものだろうと思うのであります。

私どもには身体があり、仕事があり、家庭があり、社会がありますが、その現実が色の世界であります。この色の世界と、私どもの心の本当のあり方である空の世界とが、ピッタリ調和していければ、それが宗教的な生活であり、それが私どもに望ましい生活であります。そういう生活が、色即是空であり、空即是色であります。生活をしておることが、こだわりのない自由な世界であるし、自由な世界でしかも毎日人間の日暮らしがしていける。

色空不二の生活

昔の言葉で申しますと、空の世界は仏法の世界であり、色の世界は世法の世界である。空の世界は真諦門（しんたいもん）であり、色の世界は俗諦門（ぞくたいもん）である。真俗不二である。仏法と世法は不二である。この社会生活と私どものこの精神の解放された世界とがピッタリ一つになって生活ができるということが、望ましいことであります。

ところが私どもの色の世界は、どちらを向いても突き当たる世界ばかり、どちらを向いてもこだわりの世界ばかり。そこには自由がなく、解放されたところが少しもない。そこでどうしても一度、空という本当に解放された自由な世界をハッキリ分かり、その境地で私どもの人生を色空不二の生活にしていくということが、私どものもっとも願わしいところであります。

しかし、この世界は本来そんなに束縛のあるものではない。そんなにこだわらねばならない世界ではない。そんなに窮屈な世界ではない。世

界は本来空であったのだ。物の世界も空だが、心の世界も空である。社会生活も空である。本来はすべてが空である。そう分かることが、般若の智慧であります。そして、そういうことが分かった方、本当に自由が分かったお方を観自在菩薩と申すのであります。

無色(むしき)。無受想行識(むじゅそうぎょうしき)

是の故に空の中には、色も無く、受想行識も無し。その空という観点から、世の中を見ていくならば、色もなく、受想行識もない。色は身体であります。受は感覚であり、想はいろいろな私どもの思いごとであります。行は欲望である。最後の識は阿頼耶識(あらやしき)であって自我である。色受想行識は五蘊、身体と心、肉体と精神でありますが、空という観点、無心という世界、こだわりのない自由の世界から眺めていくと、身体も精神というものも本来ないのだと。

すべては動いている

その動いている姿を空という

この空ということもいろいろな説明がありますが、いちおう理屈を申します。すべてのものは動いておるのだ。私どもの身体は刻々と細胞が変化をしておる。すべてが一秒を争わず動いておるのであるから、私どもの身体は刻々と変わっておるのだ。一分間前の自分と一分間後の自分は自分が違うはずである。昨日の自分と今日の自分は自分が違うはずである。だからそこに身体というものは実在するのではない。動いていくのだ。その動いていく姿をしばらく空と名づけるのである。こういう見方も、いちおうあります。

しかし、もっと具体的に無心という観点から眺めるならば、私どもは胃があっても胃を意識しておらん、心臓があっても肺があっても意識しておらん。背中があっても意識しておらん。足の裏があっても意識しておらん。それだったら身体はないではないか。無意識という世界においては、身体はあってもないと同じではないか。色は空に異ならず。身体

はあってもないと同じことである。空という観点から見ると身体はないのだ。

役者が舞台で踊る時には身体はないのだ。仕事に夢中になる時には身体はないのである。空、無心という解放された世界から眺めると、身体は少しも私どもの心にこだわるものではない。少しも妨げにならん。身体はあっても邪魔にならん。身体があって邪魔になる人は、病気の人で、健康な人ではない。もう一つ言うならば、病気があっても妨げにならん。さらに言うならば、病気も空である。身体は空である。感覚も空である。

いろいろなことを私どもは考えますが、考えたことがどこに実在するかと言っても、つかまえどころのないものであるから、いろいろ考えたことも空である。あれが欲しいのこれがしたいのと欲望を感じますが、これも突きつめて言えば空である。自我というものも、どこにあるのか。おれが一番可愛い、私が一番大事だの、私の体面をどうして下さるかと、

この私というものに、皆こだわっておるのでありますが、その私というものも出してみよと言われたら、出せるものではない。これも空である。是の故に空の中には、色も無く、受想行識も無し。だから、無心、無念、何も思わないという観点、無意識という世界から眺めると、身体も空であるし、感覚も空であるし、いろいろな判断を下し、思うことも空であるし、いろいろな意欲を起こすことも空であるし、自我も空である。

無眼耳鼻舌身意(むげんにびぜっしんい)

身体はあっても少しもその空の世界の妨げにはならん。いろいろなことを思うたり、悲しがったり、喜んだりしておるが、それが少しも空の世界には妨げにならん。身体はあってもないと同じこと、心はあってもないと同じこと。空という広々とした世界には身体もなく心もない。目もなく耳もなく鼻もなく舌もなく身体もなく心もない。

空だから何でも感覚していく

目も空である。しかも外のものは何でも見ていきます。松の木を見て、紅葉を見て、お寺を見て、岩を見て、次から次へ何でも物を見ていきますが、これは目が空だからである。目の中に物があったら、もう次のものは入らんはずだ。つまり目が空だから次から次へ何でも見ていくことができる。耳も空だから次から次へ何でも聞いていくことができる。鼻も空だから次から次へ何でも嗅いでいくことができる。舌も空だから次から次へ何でも味わっていくことができる。甘いものを食べた後で果物を食べると、味が非常に悪く、果物の味が消されますが、それは舌のせいではなくて、舌の先に、先に食べた甘いものが残っておるからです。舌そのものは空であるから、次から次へ物が味わわれていくわけであります。

明治時代に円朝という有名な咄家（はなしか）がありましたが、山岡鉄舟先生の道場へ頼まれて行って落語をやった。そしたら鉄舟先生が、

舌なくしてしゃべった円朝

「わしは、子供の時分からお母さんに寝かせてもらいながら、桃太郎の話を聞いたが、何度聞いても桃太郎の話は面白いと思った。おまえさん、桃太郎をやってくれんか」

と言われた。子供ならともかく、髯（ひげ）を生やした大の男たちを相手に、桃太郎の話をしてくれと言われたのには、さすがの円朝も困ったでしょうが、仕方がないから桃太郎を一席やったところ、鉄舟居士が、

「ちょっとも面白くない、おっかさんのほうがよっぽど面白かった。だいたいおまえは舌でしゃべるからいかん。咄家が舌でしゃべるようなことではあかん」

とエライこきおろされた。どうもそれが気になってかなわん。舌でしゃべってはいかん、と言われたが、舌でしゃべらなくてはどこでしゃべるのか。しゃべりようがない。商売で毎日寄席へ行ってしゃべるけれども、この鉄舟居士の一言がどうも気になってかなわん。それからまた先生を

訪ねて行って、
「せんだって、あなたは舌でしゃべってはいかんと言われたが、舌でしゃべらなかったら何でしゃべるのですか」
「そこだ。そこをひとつ会得せんというと名人にはなれん」
「どうしたら舌なしでしゃべれますか」
「まあ、坐ってみろ。坐禅をしろ」
と、うまいこと、鉄舟居士に誘われてしまって、それから一生懸命坐禅をやった。三年ほど坐禅しますと公案が透り、見性した。そうしたら鉄舟居士が、
「よかろう。桃太郎をやれ」
と言われるので、また桃太郎をやったら、鉄舟居士が、
「よろしい、今日の桃太郎はよかった。それでいい」
と大いに褒められた。それから京都から滴水和尚（由理滴水／一八二二〜一

八九九）が東京へ来られるのを待っておって、
「とうとう咄家を一匹たたきだしましたが、何とか名前をつけてやりたいが、何としましょう」
と滴水和尚と相談をして、無舌居士という居士号を与えられたという話があります。谷中の全生庵には鉄舟居士の墓がありますが、その前に円朝無舌居士という落語家の墓が今もあります。無舌だ。こういう境界になりますと、舌があってもないと同じことである。身体はあってもないと同じことであります。

無色声香味触法（むしきしょうこうみそくほう）

この眼耳鼻舌身意を六根と申しますが、つまり五感に意識を添えて六根であります。この六根があるために外の世界が私に認識されるのであります。外の世界が分かるもとですから、これを六根と申します。その

六境

六根の対象になる世界が色声香味触法。これを六境と申します。六つの世界である。私どもの感覚がこの六つの世界にだまされがちなので、この世界を六塵とも申します。

十二処

六根と六境、これを合わせて十二処（じゅうにしょ）と申します。そこで、この何も思うことのない空という世界は、いわゆる六根清浄の世界であります。

六根清浄

　山へ登られる方は、「六根清浄、六根清浄」と言って登られるが、目は自然の景色を眺め、花の色を眺め、耳は谷川の音を聞き、小鳥のなきごえを聞き、鼻には草木の臭いを嗅ぎ、舌には六根清浄と唱え、身体には涼しい風を受け、心には何も思うことがない。六根清浄、その何もない清浄な心で山の上に登って御来光を拝む。これが山岳宗教と申しますか、

空とは清浄であること

日本の山登りの宗教ですが、この日本の神道では清浄ということをやかましく申すのでありますが、この清浄ということが、仏教の空ということにもなると思うのです。

理趣分（りしゅぶん）をよみますと、この清浄ということを空の代名詞にたくさん使っております。清浄で何もないのではない。あるけれども穢れがない。心はあるけれども、一念の穢れがない。何もまだ思わない、うぶな心だ。六根清浄でありますから、眺められる世界も清浄である。

目が清浄であれば、見られる世界も清浄である。耳が清浄であれば聞かれる世界も清浄である。鼻が清浄であれば、嗅がれる世界も清浄である。舌が清浄であり、空であれば、味わいも清浄である。身体が清浄であれば、触れる世界も清浄である。心が清浄であれば、対象になるいろいろなできごとも清浄である。主観が清浄であれば、おのずから客観も清浄である。

眼耳鼻舌身意も無く、色声香味触法も無し。実に、空という世界には、何も思わない世界には、こだわるものは一念もない、一点のこだわりもない。主観もこだわるものがないし、客観の世界にもこだわるものがな

いのであります。

無眼界(むげんかい)。乃至無意識界(ないしむいしきかい)

六根、六境、六識。十八界

そこで今度は、無眼界、乃至無意識界とありますが、心経は何でも言葉を簡単にして、なるべく簡素にして真理をつかみたいというのが目的でありますから、非常に略されてあります。この乃至という言葉によって、その中間が略されているのです。眼の世界があれば、見られる世界があり、そうして眼識界という世界がある。つまりこの世界は、眼界、見る世界と、色界、見られる世界と、眼識界、見た世界と三つある。その三つの世界が、六根それぞれに皆つくのである。眼界、耳界、鼻界、舌界、身界、意界の六根の世界、色界、声界、香界、味界、触界、法界の六境の世界。眼識界、耳識界、鼻識界、舌識界、身識界、意識界の六識の世界。これを合わせて十八界というのであります。

眼識界、耳識界、鼻識界、舌識界、身識界、意識界。この識界というのは、経験の世界、記憶の世界。私どもが花を見て赤いと見る。これは私どもが直感と言っておりますが、花を見てすぐ花だと見るのは直感ではあるけれども、やっぱり前に見た経験から、ただちにこれを花と判断していくのである。私どもの心の底にちゃんと花というものの記憶があり、経験がある。猫を見れば猫だとすぐ判断をしますが、これは直感ではなく、やはり過去の経験を通して猫だと私どもは見ていくのです。猫を見たこともない時、突然に猫が飛び出して来たら私どもはビックリするでしょう。猫を見て猫だと意識するのは、猫を見た経験の世界が眼の底にあるからです。これを眼識という。私どもも話ができるのは、皆この記憶があるからであります。

「今年の秋も一度京都へ行こうじゃありませんか。苔寺の庭を見て、嵐山を見て、妙心寺で昼飯を食べ、それから高雄の紅葉を見に行きましょ

う。この前妙心寺に行った時は……」と話ができるのは、私どもの頭の中に一つの世界を持っておるからです。「子供の時分に修学旅行で九州へ行った時は、阿蘇へ登った時は、雲仙に登った時は……」と友達と話ができるのは、私どもが記憶の世界の中に雲仙を持っており、阿蘇を持っておるからでありましょう。

そこでこの世界は見る眼の世界と、見られる色の世界と、そうして一度見たことのあるという経験の世界と、この三つの世界がある。眼にも三つの世界があり、耳にも三つの世界があり、鼻にも三つの世界があり、舌にも三つの世界があり、身体にも三つの世界があり、心にも三つの世界があるから、これをすっかり合わせて十八界と申します。その中から初めの眼界と終わりの意識界だけをここに挙げて来て、中の十六界を乃至の二字で略したのであります。

そこで、「眼界も無く、乃至、意識界も無し」ということは、私どもの

経験の全世界をひっくるめて、全宇宙をひっくるめて、主観も客観もひっくるめて、何もかも空という世界には何もないのだと、言われておるのです。私どもの無心という心の広さ、空という心の広さは実にそういう広さであります。

あさみどり澄みわたりたる大空の
　広きをおのが心ともがな

この日本晴れの秋空のような、どこまで眺めても塵一つ邪魔なものはないという広さ。それが空という世界だ。主観もなければ客観もない。見る世界もなければ見られる世界もない。かつて見られた世界もない。尽大地塵一つないという広々とした世界が空という世界であり、無心という世界である。私どもの生まれた時の赤子の心は、実にそういうとらわれのない自由な、広々とした心であったのであります。

では、この自分というものもない、何もないという空の世界から、ど

見る世界も、見られる世界も、かつて見られた世界もない

何もない世界からどうして万象は出て来るのか

うして一切の万象が出て来るのか。何もない世界からどうして森羅万象が出て来るのか。

このごろ、外国から来る哲学者の中には、禅というものに心を引かれておる方が多いと申します。近代、ヨーロッパでさかんに行なわれておるのに実存哲学というのがあります。この森羅万象がどこから出て来るのか。近世までは、神が森羅万象を造った、とされていたが、そういうことはもう哲学では否定されておる。神の否定であります。

そうすると森羅万象が出て来るそのもとは、宇宙そのものの中にあるのではないか。あるいは人間の理性の中にあるのではないか。人間の理性がそう宇宙を眺めていく。理性と宇宙の真理とは一つだ。

こういうふうな考えに進んで来ているわけでありますが、これが原子だの電子だのということになって来ると、物の変化というものが結局電子の数によって分子が分かれて来る。その分子の数によっていろいろ森

拄杖子、化して龍と為り、乾坤を呑却す

羅万象が変化して来る。その電子の数というようなものはどうしてそこに秩序があるのか。そういう秩序がどこから出るのか。そんな秩序はないのではないか。原子分子の世界に入ったら、これは無ではないか。結局、森羅万象の出て来るもとは無ではないか。無によって無の中からすべてを肯定して来なければならん。

というような考え方が現代の哲学らしいのですが、そういった見方は非常にこの禅の見方と近いというので、禅というものがやかましく取り上げられておると言われるのでありますが、その森羅万象はどこから出て来るのか。

禅宗の公案に、「拄杖子、化して龍と為り、乾坤を呑却し了われり」というのがあります。雲門和尚が、

「わしのこの拄杖が龍となって、天地宇宙すべてを呑んでしまう。森羅万象を呑んで、空になってしまう、さあ、どこから森羅万象は出て来るか」

こう質問するという公案があります。この拄杖が龍となって、森羅万象を呑んでしまい、天地何もかも空になってしまう。そういう体験をしなければ、本当に森羅万象を直感することはできん。直感したつもりでおっても、私どもはいつも経験を眺めておる。

人間は経験の世界に閉じ込められている

猫が飛び出して来てもビックリしないのは、いつもの猫を見ておるからだ。昨日も一昨日も変わらない、猫という概念を見ておるからだ。つまり意識界を眺めておるのだ。リンゴが落ちるのを見ても、私どもはニュートンほどは驚かない。それは、リンゴは落ちるものだと思っておるからだ。つまり概念の世界、経験の世界に私どもは閉じ込められておるから、何を見ても驚かない。

ところが、見る世界も無であり、見られる世界も無であり、かつて見た記憶の世界も無になるという、天地宇宙一物もない清浄の世界、神が天地を造らない先の清浄の世界、そういう世界に一度入って、その世界

絶対無から忽然として現実世界が現われて来る

からこの世界を眺めた時には、本当の世界が分かるのである。お釈迦さまが明けの明星を見て悟られたというのはそこだ。霊雲が桃の花を見て悟ったというのはそこだ。経験の桃の花ではない。開闢以来初めて出て来た桃の花を見たのだ。そこに初めて創造された桃の花を見たのだ。初めて光っている星をそこに見たのだ。絶対無からそこに忽然として現実の世界が現われて来たのだ。その世界が本当に私どもに味わわれる、もっとも真実の世界であります。

眼は眼そのものを見ることはできん。しかしこの忽然として桃の花を見たというはたらきによって、眼のあることを、私どもは自覚するのだ。自覚するより仕方ない。鐘の音を聞いたという経験。純粋経験というような言葉もありますが、すべての経験を超越した初めての経験で鐘の音を聞いたということによって、私どもは耳のあることを自覚し、自己のあることを自覚するのだ。

何もかも清浄になったところで自覚された自己

　そこで初めて自覚されたその心が、本当の自分である。何もかも空になった清浄になった世界から眺められた世界が真実の世界であり、何もかも清浄になったところで自覚された自己が真実の自己である。そういう世界が分かり自己が分かることを見性と言い、悟りを開くと申すのであります。

　そこで、そういう悟りに入るまでには、まずこの空ということをしっかりつかまなくてはいかん。六根清浄である。世界も清浄である。経験の世界も清浄である。

　こういうことは、皆さんがじきに体験できることであり、そんなに難しいことではないと思います。六根清浄である。眼のないこと。見られることのないこと。見た世界のなくなること。こんなことは何でもないことでありましょう。何か自分の仕事に熱中してその仕事だけになりきった時には、こういうことは分かると思うのであります。

一燈園では別に神とも仏とも申しませんが、下座の行をして、便所の掃除をしていく。そこにお光を拝んでいくと申します。この私どもの日常の生活の中に、本当に没頭すると、こういうことが分かるようになるのであります。

第五講

無無明。亦無無明尽。乃至無老死。亦無老死尽。無苦集滅道。無智亦無得。以無所得故。

無明も無く、亦た無明の尽くることも無く、乃至、老死も無く、亦た老死の尽くることも無く、苦、集、滅、道も無く、智も無く、亦た得も無し、無所得を以ての故なり。

盲目的本能も無ければ、盲目的本能の無くなることも無い。また老死の苦しみも無ければ、老死の苦の尽きることも無い。苦悩も無ければ、苦悩の因である貪愛も無い。苦悩からの救いも無ければ、そのための修行も無い。知ったというものも無ければ、得たというものも無い。本来得らるべき何ものも無いからである。

無無明。亦無無明尽

私どもにこだわりになるのは、やはり見る世界でもなく、見られる世界でもなく、見られた世界でもなくして、何か心にどうしても清浄になりきれんものがある。どうしても清浄になりきれんものが心の中にどうしてもある。朝起きて秋晴れの空を眺めて、今日は日曜で仕事もなし、何もせんでもいいと、煙草を吸うて、さて何をしようかという時には、無心であってこだわるものは何もないようでありますが、そんな時にもなお心の奥底にこだわるものが一つある。取れんものが一つある。清浄になりきれんものがある。

それを無明というのであります。人間の存在の根底になる根本の煩悩、盲目的本能であり、これがあるために、人間は生、老、病、死の苦を繰り返すのであります。しかし、よく考えてみると、その無明というもの

も実は空ではないか。実在するわけではないのだ。

盤珪和尚のところへ人が来て、

「私は生まれつき短気で困りますが、短気の治る方法はござりますまいか」

と尋ねたら、盤珪さんが、

「おまえさん、妙なものを生まれつき持っておるのやな。短気というものを持っとるのか。そんなものがあってはそれはいかんじゃろう。さあ出しなされ。わしが治してあげよう。さあ、出しなさい」

「出せと言うたって、そうすぐ出るわけじゃありません。何か気に入らんことがあると、すぐにムカムカと出て来るのです。今出せと言われても出せません」

生まれつきあるのではない

「それではおまえさん、生まれつきあるのではない。気に入らんことがある時にムカムカと出るだけじゃないか。出た時は短気があるが、出るまでは無じゃないか。出るまでは空じゃないか」

青空は実在だが、雲は実在ではない

こう言われてみて、「なるほど」と考えたら短気が治ったという話があります。

貪瞋痴（とんじんち）ということを仏教では申します。あれが欲しいこれが欲しいという貪る（むさぼる）心。あれも気に入らんこれも気に入らんと腹の立つ心。ああしなければよかった、こうしなければよかったという、すんだことに対する愚痴の心。そういうものも実は何も実在するわけではありません。ちょうど青空に雲が湧くように湧いて出るだけであって、青空は実在だが雲は実在ではない。雲は湧いて出るだけである。

こう分かれば無明もない。しかし、無明というものは実在するものではないけれども、なくなるものでもない。腹が立つというようなものは、身体中どこを探しても何もありはせんが、しかし腹の立つことはなくならん。

無明も無し、無明の尽くることも無し。本当に秋晴れの空は、このと

雲があるのが面白いではないか

煩悩があってもよし、なくてもよし

おり雲一つないスカッとした日本晴れだということが分かれば、雲があってもいいではないか。雲があるのが面白いではないか。こういうことになる。

　さまたげぬほどの雲あり月まどか

俳句になっておるかどうか知りませんが、昔、老僧が作った駄句であります。お月さんがまん丸だということが手に入れば、雲のあるのも愛嬌ではないか。雲があってもいいではないか。無明は実在するものではない、お互いの本性は煩悩なぞあるものではない、スカッとした無心が、空が本性だと分かれば、煩悩はあってもいいではないか。出て来たっていずれまもなく消えるものだ。

こう徹すれば、煩悩があるのも、かえって人間味があっていいではありませんか。煩悩があってもよし、なくてもよしと。こういう世界が空という世界ではないかと思うのであります。

雷の上に出れば、少しも怖いことはない

野原桜州という絵描きがいて、私の師匠の精拙和尚のところへ、よく遊びに来ておりました。体軀堂々たる立派な男でありますが、どうしたものか、大変雷が嫌いで、雷が鳴ったら大の男が蚊帳をつって中で震えているような男でありました。たまたま天龍寺に遊びに来て、愛宕山にケーブルができたということで、

「今日はケーブルというものができたから、あれに乗って愛宕山に登ってみようじゃないか」

「よかろう」

ということになった。そこで、「野原どうだ」と言うと、

「私はもう夏には山に登らんことにしておる。今ごろ、山に行ったら必ずアレが来よるんじゃ。もうご免こうむる」

「そんなことを言うな。ケーブルでスッと上がるから道中で会うようなことはないじゃろう。いけいけ」

と皆に誘われて、しぶしぶケーブルで愛宕山に登り、駅を降りて、水口屋という小料理屋で一杯飲んだ。そうすると果たしてそこらが曇ってゴロゴロとやって来た。桜州氏、案の定ブルブル震え出した。
「これだからわしは今日来んと言うのに。おまえらが誘いよるもんじゃから。ソレ、来たじゃないか、来たじゃないか」
と言って窓からちょっと見たところが、幸いなことに山のテッペンですから、雲は山の下のほうに湧いている。ゴロゴロいうのも下のほうで鳴っておる。稲妻も下のほうで光っておる。上からしばらくじっと見下ろしておりましたが、これなら安心だと思ったか、いくら雷が物好きでも上には落ちて来るまいと思ったのか、「雷ほど面白いものはない」と言って、手をたたいて喜んだという話があります。
雷の下におるから、いつも雷が苦になって恐れなくてはならんが、雷の上に飛び出しておれば、ちょっとも怖いことはない。雷の鳴るのがこ

無明の下敷きになるから、苦しむ

んなに面白いものはないという世界になるわけであります。
無明の下敷きになっておるから苦しまなくてはならんのであるが、無明なぞというものはないものだ、しかし人間生きておる間は無明がなくなるということもないと、こう分かるならば、煩悩があってもよし、なくてもよしと、こういう自由な広々とした世界に入ることができるでありましょう。

乃至無老死（ないしむろうし）。亦無老死尽（やくむろうしじん）

老の時は老、死の時は死

老死は年をとって死ぬことでありますが、この無心という世界、対立を離れた空の世界、無意識の世界から見るならば、老の時は老であり、死の時は死である。若と老とが対立するからそこに老があり、生に対立するから私どもはそこに死を考えるのでありますが、対立を離れた空の世界には、老死はないはずであります。年をとってもいっこう年をとっ

たような気がせん、気分だけは若い時と同じだとよく言われますが、無心の世界、対立を離れた世界は、年をとっても年をとったと思わんはずであります。

「生也全機現、死也全機現」だ。生きておる時には生きておることに精神が充実し、死の時には死に精神を充実するならば、そこに死はないはずである。涅槃ということは不生不滅ということでありますが、この空の世界、無心の世界は不生不滅、不垢不浄、不増不減である。だからもちろん老死があるはずがない。

空の世界には老死はない

しかし、現実の私どもの身体はやはり年をとるのであり、やはり死ぬ時が来るのである。空の世界は老死のない世界であるが、色の世界にはやはり老死はあるのである。年をとることも死ぬことも病気をすることもあるのであります。

亦た老死の尽くることも無し。空の世界、無心の世界が分かるならば、

十二因縁

十二因縁	
1 無明 2 行	過去二因
3 識 4 名色 5 六入 6 触 7 受	現在五果
8 愛 9 取 10 有	現在三因
11 生 12 老死	未来二果

もとより生死はないのであるが、生死があっても何とも心に邪魔にならん。病気があっても心の邪魔にならん。災難があっても心の邪魔にならん。そういう世界が空という世界であります。

これも十二因縁ということを説明しなくてはなりません。お釈迦さまが初期に示された教えの中に、十二因縁ということがあります。

まず「無明」、迷いの根本、いわゆる盲目的本能である。その煩悩から行動が出て来るのが「行」である。その行から、我という自我意識が出て来る。お互いがお母さんの胎内に宿ることを「識」と言うのであります。お母さんの胎内に命が宿ると、身体と心ができる。これを「名色」と言う。そして、次第に六根がそなわる。これを「六入」と言う。そして、生まれ出て来ると、初めて外の世界に触れる、これを「触」と言う。触れると感覚がはたらいて「受」が起こる。感覚があるとそこに愛情が出て来る。「愛」である。好きなものがあると、自分のものにしようとい

う所有欲が出て来る。これが「取」だ。取るとそこに「有」という所有観念が出て来る。これが迷いであります。すると次にどこかへ迷うて生まれて来るのが「生」である。そして「老死」、年をとって死ぬという結果が出て来る。

　過去の二因としての無明、行。現在の五果としての識、名色、六入、触、受。現在の三因としての愛、取、有。未来の二果としての生、老死。これを十二因縁と言うのであります。

　要するに無明という根本の原因によって、死という結果になるのである。この十二因縁を繰り返し、生死を繰り返すのが凡夫の世界であります。こう古代のインドでは説かれているのであります。

　ところが般若心経は簡略を尊ぶので、十二因縁の中の初めの無明と終いの老死だけを出して、真ん中の十を略してあるのです。般若の空という世界には、生死ということはもう既にないのであるが、身体があるうち

は生死も免れんが、あってもいいではないかと。とらわれのない世界である。

お釈迦さまが一番悩まれたのは、死という問題であります。カピラ城の皇太子に生まれ、ヤシュダラ姫という美しい妃をもらわれて、ラゴラという可愛いお子さんもできて、やがては皇帝になられるご身分のお方でしたが、死という問題を考えられました。

人間は皆な死ぬのだ。金持ちも貧乏人も死ぬ。きれいな人も、みにくい人も、学者も、皇帝も皆な死ぬ。わしも死なねばならん。死んだらなくなる。そんなことが分かっておって、どうして暮らせるか。明日死ぬかも知れん。死んだらそれでおしまいではないか。死という苦しみ、この悩みを解決しないで生きておるのはおかしい。何でもこの死という問題を解決したい。死とは何か、本当になくなるのか、死のない世界はないか。

お釈迦さまはその死という問題にぶつかられて、可愛い妃や子供まで捨てられ、カピラ城を出られて出家なさり、山中で六年間の修行をなさったのであります。

この老死の悩みから救われるには、根本の無明を捨てないといかん。この無明、煩悩さえなくなれば、無明によって起こる行がなくなる。行がなくなれば識がなくなる。識がなくなれば、名色がなくなる。名色がなくなれば、六入がなくなり、六入がなくなれば触がなくなる。受愛取有生老死もなくなる。老死の苦しみから救われようと思うならば、根本の煩悩、無明を捨てよと、十二因縁を説かれたのであります。

捨てなければならない無明もない

しかし、お釈迦さまの教えも、後の大乗仏教になりますと変わります。その捨てなければならん無明もない。無明を捨てて、無明がなくなることもない。最後の老死もない。老死もないから老死が尽きてなくなるということもない。般若の智慧は、鏡のようにきれいなもので、その鏡の

中には、生ずるものもなければ、滅するものもなければ、汚れることもなければ、きれいになることもなければ、増えるものもなければ、減るものもない。その般若の智慧が分かるならば、そこには無明もなく、無明の尽くることもなく、乃至老死もなく、老死の尽くることもないと、般若心経には観音さまがお示しになっておるのであります。

無苦集滅道

これは四諦の法門と言って、根本仏教の大切な教えであります。根本仏教は、もう十二因縁と四諦だけだと言ってもいいくらいであります。遺教経の中には、お釈迦さまが最後の息を引き取られる時に、「おまえたち、四諦の法において疑いはないか。疑いのあるものは今のうちに尋ねるがよい。苦集滅道の法において疑いはないか」と三度まで尋ねられたが、誰も答えなかった。その時にアヌルダという

弟子が皆を代表して、

「月は熱からしむ可くとも、日は冷やかならしむ可くとも、仏の説きたもう四諦は、異ならしむ可からず――たとえ、お月さんが熱くなっても、お天道さんが冷たくなっても、あなたのお説き下された苦集滅道の四諦の法は、絶対の真理であります。皆、よく分かっておりますからご安心下さい」

と答えられたということがありますが、釈尊が亡くなられるまで、その一生を貫いて説かれた教えが四聖諦の法門であります。

諦という字は、「あきらめる」という意味でありますが、私どもが人生の問題をつきつめていくと、どうしてもこうならなくてはならん、というギリギリの真理につきあたりますが、その真理が四つあり、これを四諦の法門としてお示しになったのであります。

四諦の法門
1 苦聖諦
2 集聖諦
3 滅聖諦
4 道聖諦

この人生は苦であるという真理

第一は苦聖諦、この人生は苦であるという真理。人生には四苦八苦が

あると教えられますが、この人生は苦のかたまりでしかないのだ、と諦めるところから、かえって、どうしたらこの苦から逃れて、永遠に価値のある人生を創造することができるか、という道が開けて来るわけであります。人生は苦であると、徹底的に諦めることが第一の真理、苦聖諦というのであります。

苦の原因は煩悩と業だという真理

第二は集聖諦（しゅうしょうたい）。それでは、その人生の苦悩はどこから出て来るのかと言いますと、それは生きておるからであります。なぜ生きておるのか。無始劫来の業によって生きておるのである。では、その業はどうして起きて来たのかと言うならば、根本の無明から起こったのであります。その根本の無明の迷いから、愛、取、有と、物質的なあらゆる素材を集めて、どうにもならぬ善悪の業を形作って来たのであります。これが苦の原因であると諦観することが、第二の真理、集聖諦であります。

言わば第二の集聖諦が原因となって、第一の苦聖諦が結果として現わ

煩悩、業を滅すれば、涅槃に入るという真理

れておるのでありますが、これを「世間の因果」と言うのであります。この苦から、お互いは解脱しなければならんのでありますが、その世間の因果の枠内にあっては、永遠に救われることはない。因果の中にあって、しかも因果に惑わされることのない境地を発見していかなければならんのであります。

そのためには、一度その根本の無明を断絶してしまえば、業の中におって業に惑わされず、不生不滅、不垢不浄、不増不減という涅槃寂静の境地が開けるのであります。この根本の無明を断ち切ることが、第三の真理、滅聖諦(めっしょうたい)であります。

では、根本の無明を切断して、涅槃寂静の境地を手に入れるには、どうしたらいいのか。そこに行としての仏道があります。

釈尊はこれを八正道と言われております。すなわち、正見(しょうけん)、正思惟(しょうしゆい)、正語(しょうご)、正業(しょうごう)、正命(しょうみょう)、正精進(しょうしょうじん)、正念(しょうねん)、正定(しょうじょう)の八つです。正見は偏見にと

八正道
1正見
2正思惟
3正語
4正業
5正命
6正精進
7正念
8正定

正とは無である

らわれずに、正しい人生観、世界観を持つこと。正思惟は正しく思考すること。正語は虚妄を言わず、正しくものを言うこと。正業は正しい行動。正命は正しい生活手段をえらぶこと。正精進は修行を怠けぬこと。正念は正しい意識を持つこと。正定は心を落ち着けること。

ここに八つの「正」という字がありますが、これは「無」におきかえても同じことでありましょう。要するに、生まれたままの清浄な心を持続し、無心であることが、最上の道であります。これが第四の真理、道聖諦であります。第四の道聖諦が原因となって、第三の滅聖諦という結果が得られるので、この二つを「出世間の因果」と言います。

至道無難禅師は、「常に何もおもわぬは、仏のけいこなり」と示されておりますが、何も思わぬ稽古こそ、正しい修行と言えましょう。何も思わぬからこそ、正しいことが話せ、正しい行動ができ、何も思わぬからこそ、正しい日暮らしができるのであります。それが正語であり、正業

四諦の法門さえも空である

であり、正命であります。そのように何も思わぬよう努力することが正精進であり、それによって無念無想の境に入り、おのずから正しい禅定力が得られるのであります。そうなれば、もう苦しみも悩みもなく、そこに寂滅為楽の悟りの世界が開けるのであります。

釈尊はこの四諦の教えを、繰り返しお説きになったのであります。まことに、この四諦の法門こそ、仏教の根幹をなす大切な教えであります。

しかし、苦集滅道も無し。その四諦もないのであると。

達磨大師がインドから来られて、まず梁の武帝に会われた時のことであります。この武帝というのは、当時、仏心天子と言われるほどの仏教信者で、寺もたくさん建て、何人もの坊さんを育て、自らは袈裟を着て放光般若経の講釈もするというような、熱心な方でありました。そこで、達磨大師が来られた時に武帝は、

「朕、寺を起て僧を度す、何の功徳か有る——わしは多くの寺を造り、何

万という僧侶を育てて来た。いったい、その功徳はいかがなものであろうか」
と尋ねられた。すると、達磨大師は、いともあっさりと、
「無功徳——功徳なぞござらん」
と答えられた。もしも、武帝が何ぞ功徳でもあると思って、寺を建てたり僧を育てたりしたのであるならば、それは正見でも、正思惟でもなく、正業でも、正精進でも、正念でもありません。達磨大師が、「無功徳」と喝破されたのはあたりまえです。そこで、武帝はさらに尋ねた。
「如何（いか）なるか是れ聖諦（しょうたい）第一義」
すると達磨大師は、
「廓然無聖（かくねんむしょう）——カラーッとして、有り難いものは何もない」
と答えられた。世間の因果さえも認めないのだから、出世間の因果などもちろんない。聖諦もなければ、第一義もないのだと。

廓然無聖
真の悟りの世界には、有り難いものは何もない

まことに真の悟りの世界には、苦諦も、集諦も、滅諦も、道諦もなく、聖諦第一義もないのであります。般若の智慧、空の世界は秋晴れの空のごとく、カラーッとして仏見法見さえもないのであります。そこのところを、般若心経は、「苦集滅道も無し」と示されておるのであります。

無智亦無得

それならば、その般若の智慧はどんなに立派なものであろうか、鏡のようにまるいものであろうか、珠のように光るものであろうか、と思うのでありますが、もしそんなものがあったならば、もうそれは般若の智慧ではない。何もないということが分かった、と言うのであれば、もうそれは智慧ではありません。そこで、「智も無し」と示されておるのであります。

また、そんな悟りが得られたら、どんなに楽しかろうか、などと考え

ましょうが、そのように受けとったり与えたりできるようなものは悟りではない。無得無失、得ることも失うこともないのが、真の悟りでなければならん。これで分かったなどと執着し、これでいいのだと、得るところをつかんでおってはいかん。だから、「得ることも無し」と示されてあるのであります。

般若の智慧が分かるならば、小乗で言う苦集滅道という四諦の真理も、実際にあるのではない。お釈迦さまの方便によって悟りを開いたという智慧もなければ、悟りを得たということもない。十二因縁もなく、四諦もなく、聖諦もなく、法もなく、仏もない。さらに言うならば、その無いということもない。何もない清浄無垢な世界、それが般若の空の世界でありましょう。般若の智慧の真っただ中に飛びこむならば、もう智慧というような意識もない。

お互いは、こうして空気の中で生きておるのでありますが、空気があ

ることを意識はしておりません。魚は水の中におりながら、水のあることを意識してはおらん。ちょうどそのように、般若の智慧が分かって、般若の智慧の真っただ中におるならば、もう般若の智慧もなくなってしまうのであります。

般若の真っただ中では、もう般若の智慧もない

以無所得故（いむしょとくこ）

この世の中には、自分のものと言えるものは何一つとしてない。家も財産も、学問も技術も、自分のものではない。善悪の業さえも、すべては因縁によって、しばらく仮りに自分のところにあるだけであって、自分のものであるものは塵一つない。この自分の体さえも、四大が仮りに集まっておるものであって、自分のものではないのだ、と分かることが般若の智慧であります。

第六講

菩提薩捶。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顛倒夢想。究竟涅槃。三世諸仏。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。

菩提薩捶は、般若波羅蜜多に依るが故に、心に罣礙無し。罣礙無きが故に、恐怖有ること無し。一切の顛倒夢想を遠離して、涅槃を究竟す。三世諸仏も、般若波羅蜜多に依るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たまう。

菩薩方は、このような徹底した英智に依って、心中何のこだわりも無い。こだわりが無いから、恐怖も無い。恐怖が無いから、あらゆる混迷邪見な想念から救われて、永遠に清寂なる境地を得られる。

三世の諸仏も、この偉大なる英智に依って、その尊厳なる普遍的人格を自覚されるのである。

菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙

菩提は自覚、薩埵は丈夫ということでありますから、菩提薩埵は、自覚を得た立派な紳士ということで、いわゆる菩薩のことであります。この菩薩は、般若の智慧によって、自分のものと言えるものは、この世界に何一つとしてない、と悟っておられるから、心の中に何のさしさわりもありません。

心の本体を自覚すれば、心にいらざる思いがなくなる

罣礙は、さしさわりのことであります。心の中にさしさわりがない、ということは、思うことが何もないということです。心の本体が分かるならば、心の中にいらざる思いごとがなくなるのであります。すべてこの世の中は、自分というものを捨てきれないところから、いろいろなさしさわりが生じて来るのであります。

もの持たぬ袂やかろし夕涼み

物の多いほうが、こだわり、悩みが多い

死にたくないと思うから、死を恐れるのだ

こういう心境が無罣礙という心境でありましょう。

心の中にこだわるものが何にもなければ、それこそ九尺二間の長屋に暮らしておっても、三宮駅に寝転んでおるルンペン諸君でも、そこが天上界であります。そういう点では、むしろ物の多い方ほどこだわりが多く、立派なご家庭ほど悩みが多いと思う。いちいち気をくばらんならん。大勢の雇い人を使っておられるようなお方ほど、悩みが多い。そういうところにおって、何ごとにもこだわらず、自由自在に思うがままにやってのける人があったなら、それは偉い人だ。これが菩薩だ。

無罣礙故（むけいげこ）。無有恐怖（むうくふ）

般若の智慧が分かって、心にいらざる思いごとがなくなり、さしさわりがなくなるならば、恐ろしいことも、怖いこともなくなります。死にたくないと思うから、殺されはせんかと恐れ、金が大事だとしがみつい

ておるから、盗まれはせんかと恐れるのが人間であります。ましてや、権力や名誉にこだわって人と争う者は、寝ても覚めても恐怖の連続であります。

勝てば則ち怨（うらみ）を生じ、負くれば則ち自ずから鄙（いや）し。
勝負の心を去れば、争い無くして自（おの）ずから安し。
寝ても覚めても安らかなり。（法句経）

菩薩には、人に勝ちたいなどという邪心がありませんから、恐怖を感じることは少しもありません。

遠離一切顛倒夢想（おんりいっさいてんどうむそう）。究竟涅槃（くぎょうねはん）

ここに「一切」とありますが、玄奘三蔵訳の般若心経には、この二字はありません。日本に来てから、いつのまにか入ったもののようであります。顛倒は考え方が逆立ちしておること、間違った考え。夢想は夢の

凡夫の四顛倒
1 常
2 楽
3 浄
4 我

二乗の四顛倒
1 無常
2 無楽
3 無浄
4 無我

ような、つまらん思いごとであります。顛倒には、凡夫の四顛倒と、二乗の四顛倒と、合わせて八つがあります。

凡夫の四顛倒とは、この世は無常な、いずれはなくなるものであるのに、凡夫はそれが永遠にあるものだと思いたがりますが、これが第一の顛倒です。次に、この世は四苦八苦で厭うべきであるのに、この世は願わしい楽しいものだと錯覚する、これが第二の顛倒です。また、人間の身体も世界も不浄にみちたものであるのに、凡夫はそれを愛すべき清浄なものだと思う、これが第三の顛倒であります。そして、自我も本来はないものであるのに、これが実在だと思う、これが第四の顛倒。つまり常(じょう)、楽(らく)、浄(じょう)、我(が)の四つが凡夫の四顛倒であります。

それに対して、声聞、縁覚の二乗は、無常、無楽、無我、無浄という四つの理にとらわれて、すべてを否定的に、厭世的に考えます。これが二乗の四顛倒であります。

幽霊の正体みたり枯尾花

心に恐怖があるから、夢想する

と言いますが、凡夫は心に恐怖があり、いらざる思いごとがあるから、すすきも幽霊ではないかと、顚倒し夢想するのであります。般若の智慧が分かった菩薩は、心中一点の恐怖の念も持たないから、一切の間違った考え、夢のような思いごとから離れることができるのであります。

菩薩は、この無常の世にあって常住の法身を発見し、苦の世界に住しながら、無上の楽土を発見し、自我を否定し尽くしたところに、諸仏の大我を自覚し、不浄の生活をすべて浄化する智慧を発得(ほっとく)され、一切の顚倒妄想を離れ、常に涅槃寂静の浄土に遊ばれるのであります。

つねにほほ笑んでおれる心境が涅槃

そこで、「涅槃を究竟す」と。涅槃という静かな常楽の境地を究竟するのである。涅槃は円寂と翻訳をされておるが、円(まどか)に寂(しず)かである。常楽である。つねにほほ笑んでおれる世界が涅槃であります。いつもにっこり笑っておれる。中宮寺の如意輪観音のように、フランスの名画モナリザ

のように、ああいう永遠のほほ笑みをいつもたたえておれる心境が涅槃であります。

涅槃とは貪欲永え（とこし）に尽き、瞋恚（しんい）永えに尽き、愚痴永えに尽き、一切諸（もろもろ）の煩悩永えに尽く、是れを涅槃と名づく。（雑阿含経）

この世の中に欲しいものが何もなくなる、求めるものは何もない。腹の立つことも何もない。愚痴をこぼすことも何もない。そういう静かな、茶道でいう「わび、さび」というような静かな境地を、しっかりとつかむことができるのである。

涅槃は人間性の本質に帰ること

この「涅槃を究竟する」ということは、私どもの人間性の本質に帰ることである。いつもほほ笑んでおりたいのが、人間性の本質でありましょう。赤ん坊がニコニコ笑っておるように、いつもニコニコ笑っておれる世界が涅槃の境地であります。すべてを受け入れることのできる心の広さを持つことであります。

芸術というのもそういうものでありましょう。こういう境地に到りますと、宗教と芸術とはもはや一つとなる。すべてを静かに受け入れていける心境が芸術的心境であります。

すべてを受け入れていける芸術的心境

よく見ればなずな花さく垣根かな

と芭蕉はうたっております。垣根の下にペンペン草の花が咲いておる。うっかりすると見過ごしてしまうのでありますが、この垣根の下に咲いておる、この可憐な、人から見出されない、この小さな白いペンペン草の花さえも、見逃さずに受け入れていける心境が、芭蕉の境地であります。

よく見れば首すじ赤きほたるかな

大きな愛情をもって一匹の螢を受けとって見るならば、ははあ、螢というのは首筋が赤いものだな、と大きな愛情と哀れみの心を持って見ることができましょう。

そのように、一切の自然を受け入れていける広い心が涅槃という心だ

人生の苦しみ、悲しみをそのまま静かに受け入れていく

と思うのであります。子供が乱暴するのを腹を立てずに、静かに受け入れて善処してやれる、細君がわがままを言うのも、じっと静かに受け入れてやれる、姑さんが無理難題を言うのも受け入れてやれる。すべてを受け入れて、しかも心はいつもほほ笑んでおれる。こういう心境が私ども人間が到達したい、最後の心境であります。そういう境地が涅槃という心境であります。

人生は必ずしも楽しいことばかりではありません。苦しいことがあり、悩ましいことがあり、悲しいことばかりでありますが、その悲しみを静かに受け入れていける心ができると、それが俳句になり歌になる。その悲しみを表現することができ、その悲しみが慰められていく。やるせない悲しみをそこに俳句にし歌にしていく余裕が、私どもの心にあると、そのどうにもならない悲しみが、悲しみのままで肯定されて来ます。

ずいぶん残酷な罪悪を犯して、その懺悔に堪えない心境でも、それを

ありのままに小説に告白してみるというと、その罪悪が罪悪のままで美しくなって来る。これが芸術というものでありましょう。

西洋にはそういう深刻な罪の描写をした文学がありますが、悪辣な、とても口では言えないような恥ずかしい行動も、ありのままにそれを描いていける心境が分かって、その心境から眺めるならば、憎むべき罪悪も肯定され、どうにもならぬ苦悶がそのまま許されて来る。そういう、すべてを受け入れ肯定していける心境が、「涅槃を究竟する」ことであり、それが菩薩でありましょう。

菩提薩埵(ぼだいさった)は、般若波羅蜜多(はんにゃはらみた)に依るが故(ゆえ)に、心に罣礙(けいげ)無し。罣礙(けいげ)無きが故に、恐怖(くふ)有ること無し。一切の顛倒夢想(てんどうむそう)を遠離(おんり)して、涅槃(ねはん)を究竟(くぎょう)す。

真理を求め、正しい人生を求めていく丈夫は、般若の智慧によるから、心にこだわりがない。こだわりがないから恐怖がない。恐怖がないから間違ったもの思いをすることがない。そこで、すべてを受け入れていけ

る大きな心が開け、涅槃を究竟して来るのである。
それは何の力かと言うならば、何も思わぬ般若の智慧である。心の中に塵一つない無心、無念無想という、般若の智慧によって、こういう境地が開けて来るのである。
これは必ずしも坐禅をせんでも、念仏をせんでも、味わうことができましょう。朝起きて煙草をくわえて、この静かな秋の畑でも眺めておる時に、「ああ、いいなア。静かだなア」と、何も思うことのない心境はどこででも味わえるはずでありますが、この何も思うことのない、こだわりのない広々とした無心ということが分かることによって、菩薩はこの涅槃という境地を開いていくのであります。

三世諸仏。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提

過去の悟りを開いた人も、現在の悟りを開いた人も、また未来に悟り

を開く方も、皆この尊厳な普遍的な人格を自覚されるのであるが、それは般若の智慧によるのである。

阿耨多羅三藐三菩提。阿は無、耨多羅は上、三は正、藐は等、三はまた正、菩提は覚、つまり、無上正等正覚と翻訳をされております。無上はこの上ないということでありますから、言い換えるならば尊厳なということであります。正等は正しく等しいということ、皆な等しくなるということですから、これは普遍的ということであり、皆が平等に持っておるということであります。正覚は人格ということになりますから、阿耨多羅三藐三菩提とは、「尊厳なる普遍的人格」ということになりましょう。

自我を捨てることこそ人生の無上のもの

近代思想では自我ということをもっとも主張するのでありますが、これは一つの過渡的な道程であり、決してこの自我を主張することが、人生の最高のものだとは考えられません。自我を捨てて、そこに尊厳な自己を発見する。これが無上なものでありましょう。

多くの人格が封建的なものの考え方のために虐げられておるという状態から、皆が自我に目覚めていくことは一つの進歩でありますが、自我が最後に到着する人間の世界であるかというと、そうではない。さらに、その自我から解脱して、尊厳なる自己に入ることが人生の究竟のものでありましょう。

どうして亀は寝ている兎を起こさないのか

このごろ外国に行った人の話であります。子供に日本の童話を話してくれと頼まれて、「兎と亀」の話をしてやった。分かりがよくて喜ぶだろうと思ったところ、ポカンとしておって質問をして言うのには、「兎さんが寝ておったら、なぜ亀さんは起こしてやらなかったのか。亀さんは兎さんを起こして、もう一度、競走をすればよいのに」これには返事ができなかった。どうも、われわれは人が寝ておる間に稼ぐことばかり教えられて来たようだ。そう言われてみると、どうも寝ておる兎を起こすほうが本当らしいと思った、という話があります。

他と自が一緒にいける世界

仏とは、尊厳なる普遍的人格を自覚された方

まことに、子供というものは無心なもので、まことに仏の心であります。そういうものが人間性の本質であるといたしますと、人間の心の中には自我を主張する以上の尊厳なものがあるはずでありましょう。自我ではなくして、自他の区別のない世界が、他と自とが一緒にいける世界が、私どもの到るべき本当の世界でなくてはならんはずであります。

そこで、私どもの人格は尊厳なものであって、しかも皆な普遍的に持っており平等である。その尊厳さは皆な誰も彼も平等であり、普遍的である。そういう人格を自覚された方を仏と申すのであります。尊厳にして普遍的な人格を自覚された方を仏と言うのであります。

禅宗的に言うならば、「歴代の祖師と手を把って共に行き、眉毛廝結んで同一眼に見、同一耳に聞く」、釈迦達磨と同じ眼でものが見え、同じ耳でものが聞こえるという普遍的な心境が悟りというものであります。

浄土門的に言うならば、「源空が信心も如来よりたまわりたる信心な

り、善信房の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり。さればただひとつなり」と。信心という世界、念仏という境地は、法然の信心も親鸞の信心も、讃岐の庄松(しょうま)の信心も岩見の才市(さいち)の信心も、誰の信心も、普遍的な尊厳な境地である。

お釈迦さまと少しも違わん境地

すべての人を菩薩として拝んでいく

そういう心境、そういう人格を、お釈迦さまと少しも違わん境地であると。私どもが普遍的に皆な持っておるのである。そしてここに、すべてを拝み、すべての人を菩薩として拝んでいく、という仏教の行き方が出て来るのであります。悟りを開いた境地は皆な同じところへ行くのであります。

A級戦犯の佐藤某という人がありました。この佐藤さんという人は陸軍大学を出て、初め東京の谷保第一連隊に入った。その時の連隊長が非常な仏教信者で、日曜日のたびに坊さんを呼んで、二時間の講義を聞かせておった。日曜日だから、皆な飛び立つように浅草へでも行きたいところです。坊主の説教なんかいやでいやでたまらん。皆な不平満々であっ

た。その不平な顔色が見えておるものだから、和尚、
「皆、わしの話を聞くのがいやだろう。浅草へ行って汁粉を食ったり活動写真でも見たいだろう。しかし、この中の皆とは言わんが、この中の幾人かは将来必ず人生にいきづまり、どうしていいか分からん時があるだろう。死ぬほど悩まなければならん時があるだろう。その時に、あの和尚がこう言うておったがと、わしの言葉を一言でも思い出してくれる者があると、わしは思う。そう思ってわしは話す」
そうやって日曜日のたびに来ては話をしておった。だんだん聞き慣れていくうちに、皆な不平な顔も消えて熱心に聞くようになった。連隊長が交代になり、後任の連隊長はそんなことには無関心であったが、坊さんのほうが出て来て話をしておった。そういうことがあり、自分も非常に精神を養われたのであるが、戦争に負けて、戦争裁判で終身刑を言い渡された時に、果たしていきづまってしまった。

人生、必ずいきづまることがある

いったい何のために生まれて来たのか

人生の目的はどこにあるのか

戦死もせず、自決もせず、殺される覚悟であった者が殺されもせず、生きておる。昔ならば、武士が縄目の恥を受けたようなものだが、こうしてまでも、生きていかねばならんのか。戦争の責任は充分に感じてはおるが、感じてみたところで、自分一人で償えるものでもない。いったい何のために生まれて来たのか。人生の目的はどこにあるのか。この意味のない人生も生きていかねばならんのか。いろいろと煩悶したが、結局、人生の目的はどこにあるのか、ということに自分はいきづまった。

そこで、悩みに悩んで煩悶をした結果、解決がついたことは、それは何も珍しいこともない、ありふれたことだが、「人生の目的は人格の完成にある。人間が生まれて来たのは、自分を完成するためだ。自分の最大価値を発揮することだ」と、こう気がついた。これはしばしば言われることであり、本にも書かれておることであり、こんなことは自分も幾たびか若い人に向かって講釈をして来たか知れん。しかし自分が本当にい

きづまって、煩悶したあげくに開けた道はこれより他になかった、と。

「人生の目的は人格を完成するにある」。そのとおりだ。誰が聞いてもそのとおりである。が、それを真剣に人生と取り組んで、そこに解決を得たのと、常識的に知っておるのとでは、大変な違いがあるわけであります。

人生の目的は人格の完成にある

人生の目的は人格の完成にある。金を儲けるのは、自己の人格を完成するための一つの手段である。社会的地位ができるのも、それは枝葉の問題である。学問をするのも自己を完成する手段である。目的は人格の完成にあると気がついたら、これは誰でもできることだなと思いついた。金がなくても、身分がなくても、学問がなくても、乞食をしておっても、その気になれば、いかなる立場に置かれても、誰でも、どこでもできることだ。

そう気がついたら、この刑務所の中が自分の人格を完成するには、もっ

人生の目的は阿耨多羅三藐三菩提を得ること

ともよい場所だと気がついて、ここが非常に有り難くなった。仕事もせずに、生活は保証され、そして本が読める。この刑務所が、自分の人生の目的のために最後に恵まれた、一番いい所だと気がついて、喜んで毎日修行させてもらっておる。

佐藤さんは、こう告白しておられましたが、そこで問題は、人生の目的は自己を完成するということであります。ここにある阿耨多羅三藐三菩提を得るということが人生の目的でありますが、果たしてわれわれにそれができるかどうか。この短い人生において、自分の人格を完成するというようなことが果たしてできるかどうか。

人格を完成するというようなことが果たしてできるのか

それは親鸞聖人の言われる自力の心ではないか。煩悩具足の凡夫、罪悪深重（ざいあくじんじゅう）の凡夫に人格の完成などということが、おこがましくもできるかどうかということが、問題になって来ます。

「禅宗は坐禅をして難行苦行をして、自分の人格を完成する教えだが、

人格はこれから完成するのではなく、生まれた時に完成されている

真宗はそうではない。雑行雑修、自力の心をふり捨てて、はからいを捨てて、あなたにおまかせさえすれば、如来さまがちゃんとして下さる。南無阿弥陀仏の中にすべての功徳が含まれておるのだから、一たび念仏を唱えれば、一念弥陀仏、即得往生だ、そのまま救われる。他力は有り難いが、禅宗は自力だ、坐禅をして難行苦行をして、人格を完成するのだ」よくこう言われるのでありますが、禅宗でも、自分の力で人格が完成するなどということは申さないのであります。その自力を捨てて、自我を捨てて、無心に無念になること、自分の持っておる本性を発揮することが、禅というものであります。つまり人格はこれから完成するのではなくして、生まれた時に完成されておるものだと分かることが禅ということであります。だから、「衆生本来仏なり」と言われるのである。生まれたままが仏なのだ。本来仏なのだ。坐禅して仏になるのではなくして、坐禅をすることによってもとに戻り、子供の心に戻るのである。「赤子の

坐禅して、もとの心に戻るのだ

赤子の心を失ってしまった

心にならなければ天国には入れない」とキリストも言われていますが、一休さんは、

おさな子がしだいしだいに知恵づきて
　仏に遠くなるぞ悲しき

と歌っておられる。生まれた時の赤子の、あの無心な心が仏の心である。明日も何も思うことのない、あの平和な心。明日の飯をどうしようか、明日もお乳がもらえるであろうか、などということは子供は考えはせん。人生の目的は何だ、などということも考えはせん。何も考えずに、ただニコッと笑っておるあの赤子の心が、われわれの本当の生まれついた心でありましょう。その無心をわれわれは失ってしまったのだ。

「おさな子がしだいしだいに知恵づきて、仏に遠くなるぞ悲しき」。生まれた時は仏心であったのが、だんだんと知恵がつき、金ができるほど、地位ができるほど、仏でなくなってしまう。強欲爺だの鬼婆がというこ

社会が発展するほど人間は堕落して来た

親の生みつけてたもったは、仏心ひとつでござる

とになってしまう。鬼赤ん坊なんていうのは一人もない。鼻が低くても、目尻がさがっておっても、少々オデコでも、赤ん坊の顔というものは仏顔だ。深刻な皺（しわ）なぞ一つもない。それがいつのまにやら、深刻な皺があっちにでき、こっちにでき、二目と見られぬような強欲な顔になってしまう。歳をとるほど、金ができるほど、身分ができるほど、学問をするほど悪くなってしまう。社会が発展するほど、人間は堕落して来た。

そこで、この阿耨多羅三藐三菩提、生まれたままに持っておる仏の心、無心の心に立ち返りさえすれば、人格は既に完成されておったのだ。これから自力で、坐禅をして人格を完成するのでなくして、生まれた時に既に完成されておったのだと、悟らせてもらえば、それが仏さまだ。盤珪さんは、やかましくそういうことを言われております。

「人々皆な親の生みつけてたもったは、仏心ひとつで、余のものはひとつも生みつけはしませせぬ」

親からもらったものは無心という心一つだ。その無心が、だんだん知恵ができて有心になったがために、お互いはだんだんと仏から遠くなってしまったのであります。

坐禅をするということは、その生まれて得た知恵、その仏性の邪魔をしておる悪知悪覚、生まれてから覚えた悪い知恵を取り払うことです。それが坐禅ということであります。坐禅してこれから人格を完成するのではなくして、坐禅をすることによって、お互いの人格の邪魔をしておる邪魔ものをとるのだ。既に完成しておる人格が分かりさえすれば、何も邪魔ものはない、煩悩があるままで結構だ、罪悪のままで結構だ、このままで結構だと肯定される心境をつかむことが坐禅ということです。他力も自力も、そこのところになると同じことでありましょう。

人格の完成。煩悩がなくなって、腹も立てず、愚痴もこぼさず、欲張らんようになり、社会と自分とは一体、人と自分とは一体、人と自然と

は一体である、という心境が開けて来ることが人格が完成されて来ることであります。仏の智慧と愛が自覚されることが人格が完成されることであります。

しかし、それはお互いの修養によってだんだん腹が立たんようになり、欲が深くならんようになり、愚痴がなくなるというのではありません。お互いが赤ん坊の無心に帰りさえすれば、そこには腹の立つことは何もないのです。生まれたままの無心に帰れば、いつのまにやら、思わんでも腹の立つことはなくなって来る。愚痴もなくなって来る、欲張りもなくなって来ます。

そこで、人格を完成するということは、自力で完成するのではなくして、「衆生本来仏なり」、生まれたままの本性に立ち返るということだ。儒教でいう明徳を明らかにするということだ。自分が生まれたままに持っておる徳を自覚し発揮するということが、人格を完成するということで

修行して仏になるのではない

本来完成されている人格を自覚すればよいのだ

す。だから禅宗も自力で修行をして仏になるのではない。ただ無心が分かれば、そのままで仏になれるのだ。それが、「般若波羅蜜多に依るが故に」だ。空が分かれば、そこで人格は完成される。無心が分かれば、そこで人格は完成されるのであります。難行苦行などはいらん。禅宗も決して難行苦行などを説くのではありません。

般若波羅蜜多だ。無心ということが分かれば、今日ただ今、皆な人格は完成されておるのです。本来完成されておる人格を自覚すればよいのだ。それが般若波羅蜜多であります。われわれが仏になる道は、難行苦行でもなければ、修養でもなければ、坐禅でも念仏でもない。ただ無心になりさえすれば、人格はもうちゃんと生まれた時に完成されておるのである。その無心になることが般若波羅蜜多であるから、三世の諸仏、過去の仏も、現在の仏も、未来の仏も、ただ無心ということだけで、人格を完成されておるのである。決して自力ではない。そこで、「般若波羅

蜜多は諸仏の母」と昔から言われておるのであります。

人生の目的は人格の完成にあるが、その人格は既に生まれた時に完成されており、本来仏であるから、お互いが一日も早く、無心になって、はからいを捨てて、分別を捨てて、その生まれたままの姿に立ち返りさえすれば、今日ただ今、皆な成仏するのである。尊厳なる普遍的人格を自覚することができるのであります。どうしても、この無心ということ、空が分かるということ、般若ということが、仏法の一番肝心かなめのところであります。

第七講

故知。般若波羅蜜多。是大神呪。是大明呪。是無上呪。是無等等呪。能除一切苦。真実不虚。

故に知る、般若波羅蜜多は、是れ大神呪なり、是れ大明呪なり、是れ無上呪なり、是れ無等等呪なり。能く一切の苦を除いて、真実にして虚ならず。

だからこの偉大なる英智こそ、最も神秘的な呪文であり、最も光輝ある呪文であり、地上最高の呪文であり、他に比類なき呪文である。この呪文が世の一切の苦難を排除することは、まさしく真実であって、一点の虚妄も無い。

故知(こち)。般若波羅蜜多(はんにゃはらみた)。是大神呪(ぜだいじんしゅ)

呪という字がいくつかありますが、呪とは道教の修行者がする唱えごとであります。日本ではマジナイということを言いますが、これが呪であります。原語では、マントラとかダラニとか言い、少し長いものをダラニと言い、短い唱えごとをマントラと申します。

あらゆる仏教の哲理を煎じつめたエキス

大峰山に参りますと、陀羅尼助という薬があります。これは百草と言いますが、たくさんの薬草を集めてそれを煎じて、煎じつめたそのエキスが、あの真っ黒なダラニスケという薬であります。実に苦いものですが、腹痛、胃腸の薬と言われております。うまく薬の名前に利用したものですが、それと同じように、あらゆる仏教の深い哲理を煎じて、煎じつめたエキスがこの呪文であります。だからごく短い言葉の中に全仏教を含むほどの深い力が、意味がこもっており、あらゆる功徳がこもって

おるのであります。
　こういう意味がダラニであります。翻訳して総持とも言います。鶴見に総持寺という寺がありますが、あの総持であります。総て持つ。京都には足利尊氏の菩提所で等持院という寺がありますが、等持とも翻訳をされておるわけです。総持とか等持。総てを持つ。等しく持つ。あるいは真言とも翻訳をされております。まことの言葉であります。弘法大師は、その最後が真言によって結ばれておるから、般若心経は秘密部の経典である、真言系の経典であると言われておるくらいであります。
　この呪は短いものですが、すべての功徳を含んでおるのであります。般若心経そのものが煎じつめられたごく短いお経でありますが、そのお経を煎じつめたものが最後のダラニになるわけです。言葉の上では、「羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶」、これがダラニでありますが、般若波羅蜜多そのものがダラニである。

盤珪国師が般若心経に注を書いておられ、それには、

ダラニとは心の名なり

「呪、陀羅尼は唐の言葉にして、総持と云うことなり。畢竟心の名なり。総持とは、すべてたもつと云うことなり。自心能く知って見よ。よきことあしきこと、長きこと短きこと、声も色もなんでもかでも対する儘に、すべて通じて、一も余ることがなきを、総持と云うなり」
とあります。

唐の時代に、万巻の書物を読破したというところから、李万巻とアダ名された李渤という有名な学者がありました。ある時、馬祖大師の弟子の帰宗和尚に、この李万巻が尋ねました。

芥子、須弥を納る全宇宙が芥子の実の中にある

「経典には、須弥、芥子を納れ、芥子、須弥を納る。芥子の実は全世界の中に入ってしまい、全世界が芥子の実の中に入ってしまう、と言われておる。芥子の実が宇宙の中に入るのはよく分かる。あたりまえだ。しかし、全宇宙が芥子の中に入るなぞと、そういうホラを吹いては困る。な

んで全宇宙が芥子の中に入ってしまうか」
こう言ったら、帰宗和尚が、
「おまえさまは李万巻と言われて、万巻の書を読んでおられるというそうだが、本当でござるか」
「さよう、まずたいがいの本は読み尽くしております」
「その椰子の実みたいな小さな頭の中に、どうして万巻の書が入ったのか」
こう言われた李渤は何とも返事ができずに恐れ入って帰って行ったという話があります。芥子の中に全宇宙を入れると言うと、大ボラを吹いているようであるが、小さなこのお互いの頭の中に、何で万巻の書が入るのか。
　われわれは良いことも悪いことも生まれてからのことを全部記憶しております。いちおう忘れておるようでも、どこかに潜在意識として残っております。ずいぶんといろいろの本を読んでも、いちいちそれを覚え

ておる。あるいは中国からヨーロッパまで、旅行に行ったところを全部覚えておる。歴史で覚えたことは、古いことは何千年の昔から今日の新聞のことまで覚えておる。その記憶はいったい、どこに入っておるのか。頭の中のどこへしまいこんであるのか。

記憶ということがどういう心理状態において行なわれておるかということは、今日の心理学でも未知数だと言われております。お互いはどこへこの記憶というものをしまっておるか。生まれてからばかりではない、心理学者の説を聞くと、人類始まって以来の先祖の経験も、潜在意識としてお互いの心の中にちゃんとしまいこんであるそうであります。

陀羅尼とは心の名なり。総持とは心の名なり。私どもの心というものは形のないものである。出せと言われても出すわけにはいかん。が、その何もない心があらゆる知識を含み、あらゆる記憶を含み、あらゆる経験を含んでおる。

心は何もかも入れる意識の蔵である

これを仏教の言葉で阿頼耶識(あらやしき)と名づけております。翻訳をすると、含蔵識(がんぞうしき)。阿頼耶というのは蔵ということだそうで、ヒマラヤ山というのは、ヒマは雪でアラヤは蔵だ。雪の蔵だ。年中雪のある山というのが、ヒマラヤということだそうですが、アラヤは蔵だ。私どもの心というものは、実に何でも入れておける蔵だ。蔵の中に物をしまっても、たいがい一杯になりますが、われわれの心の蔵はいくら入れてもいくら入れても際限がない。なんぼでも入る。

実にお互いの意識というものは蔵である。何もかも入れておる。この何もかも入れておる意識の総合体の中から、私どもは自我というものを一つ作り出して来る。我という観念を作り出して来る。それが仏教で言う無明であり、そもそも迷いのもとであります。一度食べたという経験を持っておると、あれをもう一度食べたいという意欲が起こって来る。少しばかり自分の所有ができると、もっと欲しいという欲が出て来る。

この阿頼耶識の記憶がもとになって、いろいろの無明煩悩が出て来るから、この阿頼耶識が、迷いのもとであり、煩悩のもとであり、自我のもとになるのであります。

阿頼耶識は無明煩悩のもと

この煩悩無明を突き破り、整理するならば、この阿頼耶識の奥に般若の智慧というものがあるのです。自我にとらわれない、我という偶像を作らない先の本当の正しい意識が、般若の智慧です。そしてこの般若の智慧は空であり、形はないけれども、全宇宙のすべてのものを含んでおる智慧、総持であります。すべてを持っておる。しかも形は何もない。無であり、空である。空であるが、何もかも含んでおる大きな智慧であります。

こういう智慧が分かるということが、般若波羅蜜多が分かるということであります。何もかも知っておって、何も形がない。何も形がないが、何もかも知っておる。栄西禅師の言葉ではありませんが、

大なる哉、心や

森羅万象ことごとく心から出てくる

「大なる哉、心や。天の高きは極む可からず、而も心は天の上に出づ。地の厚きは測る可からず、而も心は地の下に出づ。日月の光は踰ゆ可からず、而も心は日月光明の表に出づ。大千沙界は窮む可からず、而も心は大千沙界の外に出づ。其れ大虚か、其れ元気か、心は則ち大虚を包んで元気を孕む者なり。天地は我れを待って覆載し、日月は我れを待って運行し、四時は我れを待って変化し、万物は我れを待って発生す。大なる哉、心や」

こういう大きな心であります。天地宇宙の森羅万象ことごとくこの心から出て来るのであり、日月はこの心によって動いていき、春夏秋冬はこの心によって変化をしていくのであります。

この般若の智慧こそ、キリスト教で言う天地創造の神であり、仏教で言う法身真如、真如法界であります。釈尊が一代説かれた説法は、皆この般若の智慧の中に入っておるのです。

空ではあるが、何もかも含んでいける広さがある

そこで、私どもが仏教を研究していく目的は、たくさんのお経を覚えることでもなく、いろいろな真理を研究することでもなくして、自分の心というものは空であるが、何もかも含んでいける広さがある、そういう偉大な心を私は持っておるのだと、こう自覚することが、一番大切なのであります。それさえ分かれば、一切蔵経をことごとくよんだも同じことでしょう。この心、般若の智慧こそが仏法のエキスであり、真理のエキスなのであります。

般若波羅蜜多は是れ大神呪なり。何も形のない無という心が、大神呪という素晴らしい唱えごとである。何も思うことのない無心という心が分かるならば、いかなる障りも寄りつくことができん。この般若の智慧が分かると、煩悩を転じて菩提とすることができ、煩悩を持ったままで、罪悪のままで凡夫がそのまま仏になれる。そういう尊い唱えごとであるから、これを大神呪と言うのである。大きな力のある、権威のある唱え

本当に無心なら
ば、いかなる障り
も寄りつけぬ

ごとである。

本当に無心ということの分かった人、般若の智慧の分かった人、ご信心がいただけた人、こういう智慧の分かった人には、外からいかなる悪魔も障りも寄りつくことができん。そういう権威のあるものである。だからこれを大神呪というのである。

建仁寺の黙雷さん（竹田黙雷／一八五四〜一九三〇）がよく提唱の時に言われたという話であります。丹波の国に化け物屋敷があって、誰が行っても食い殺されてしまう。そこで、ある侍が、

「よし、わしが退治してやる」

と言って出かけて行った。いつでもござれ、と刀を持って化け物の出るのを待っておったら、台所から女中がパタパタとやって来て、

「旦那さま、大変でございます。鍋が歩き出しました」

と言う。そこで侍が、

「鍋だって足がある。歩くのはあたりまえじゃ」と。それでその晩はすんだ。あくる晩になると、「旦那さま、大変でございます。鉄瓶が何やらものを言い出しました」「あたりまえじゃないか。鉄瓶だって口がある」それでその晩はすんでしまった。三日目に、「旦那さま、大変でございます。おくどさんに松茸がたくさん生えて来ました」「なに！」と言ったまま返事ができなかったら、食い殺されてしまった。そういう話を黙雷さんが持ち出され、「禅宗坊主だったらその時何と挨拶するか」と言われたということでありますが、相手に引っ掛かると負けてしまう。こちらが無心であり、無であると何が出て来ても負ける時はないのであります。

是大明呪。是無上呪

比べるもののない最上の唱えごと

きれいな鏡のような清浄無垢な心でおり、六根清浄でおるならば、いかなる悪魔も障りも災難も寄りつくことはできない。この般若の智慧はあらゆる心の中の愚痴を解消し、心の中の闇を破っていく、実に明るい唱えごとである。心の中の煩悩妄想の闇を照らしていく大きな唱えごとである。心の中どころではなくして、光明遍照十方世界、十方世界に行き渡るような大きな唱えごとである。この般若の智慧は、これ以上比べるもののないほど最上の唱えごとである。

世間にはいろいろな唱えごとがあり、お祈りの言葉があり、お経があり、いろいろ力のある方法がありましょうが、何も思うことがないという、無が分かり空ということが分かった心が、一番最上の唱えごとでありましょう。

是無等等呪（ぜむとうどうしゅ）

無等は等しきもの無しで、これの複数が無等等であります。あるいは、等しき無きものに等しいと。等しき無きということは仏ということでありますが、仏さんと等しい、同じ唱えごとである。この般若の智慧が分かると、三世諸仏と同じ心の状態になれるのである。そういう立派な唱えごとである。

こう、般若の智慧を呪という言葉を借りて褒めておられるのでありま す。是れ大神呪なり、是れ大明呪なり、是れ無上呪なり、是れ無等等呪なり。これは私どもの本来持っておる心、悟りの心を褒めておられるのであります。

能除一切苦。真実不虚

初めのところに、「照見五蘊皆空。度一切苦厄」とありましたが、あの言葉と首尾一貫しておるわけです。この般若の智慧は、大神呪であり、大明呪であり、無上呪であり、無等等呪であると。空が分かり、無が分かるということは、実にこの上もない大きな広い心境が開けて来ることであると。実に権威のある、この上のない心が開けて来ることであるから、一切の苦しみ、悩みというようなものはことごとく消えてしまうのである。

無がわかればすべての苦しみはなくなる

聖一国師の法語の中で、九条道家公の質問に答えて示しておられます。

「われわれは煩悩が多く、妄想が多いので、とても悟りなどは開けんと思いますが」

と九条公が質問をしたら、聖一国師が、

闇をのけることはない
明かりさえあれば闇はおのずからなくなる

「煩悩を除こう、妄想を取ろうと思ってはいかん。そんなことをして取れるものではない。闇は暗いから、闇というものを取ってしまってそこに明るいものが出て来ると思ったら、いつまでたったって明るいものは出ては来ない。明かりさえ持っていけば闇はおのずからなくなる。明かりがあるところには闇はない。それを、闇をのけてからそこに明かりをつけようなんて思ったら、それはできることではない」

と示されております。

一切の苦しみを取ってしまってから、そこに悟りが開けるなどと思ったら、救われるところはありません。苦しみは苦しみ、悩みは悩みでほっておいて、そこに、何ものにもかかわらない般若の智慧というものが会得できると、苦しみはほっておいてもなくなるのだ。そこが、是れ大神呪であり、是れ大明呪であり、是れ無上呪であり、是れ無等等呪と言われるところであります。

ご祈禱しなくても信心さえすれば、災難のほうが逃げて通る

近ごろは一般大衆にも分かりやすい手っ取り早い宗教がはやり、いろいろな功徳を説かれるのでありますが、親鸞聖人は、
「願力不思議の信心は、大菩提心なりければ、天地にみてる悪鬼神、みなことごとくおそるなり」「念仏者は無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪悪も業報を感ずることあたわず。諸善もおよぶことなきゆえなり」と示しておられます。悪魔を払うというようなご祈禱をせんでも、ご信心をいただけば、悪魔のほうが寄りつかなくなり、災難のほうが避けて通るのだと。

「病気が治りますように、災難が逃れますように、商売が繁盛しますように」とご祈禱し、そういう心の持ち方をすれば、そういう幸せな世界が必ず出て来るのだと、今の宗教は教えられるのでありますが、そういうことをせんでも念仏さえ唱えておれば、頼まんでも商売は繁盛し、災

難も寄りつかず、病気にもかからん。こういう信念が親鸞聖人の信念であります。

そのとおり、聖人は何もご祈禱をせんでも九十までも長生きをされて、健康ではたらかれたではありませんか。

はからいを捨て、分別を捨て、あなたにまかせきった心境で暮らすならば、どんな災難も悪魔も寄りつくものではない。みずから頼まんでも、願わんでも、病気もせんし、商売も繁盛するし、幸せな月日を送らせていただくことができる。これが親鸞聖人の生活に対する信念だと思うのであります。

一燈園の西田天香（てんこう）先生は、「ただ奉仕をし、感謝の日暮らしさえすれば、決していきづまりもなければ、破産もなければ、失業もなければ、食えんこともない。無一物ではあるけれども、この無一物の生涯を始めて五十年間、食わずにおった日は一日もない。ただ懺悔、奉仕の生活さ

自己の真実をつかむ者には、どんな苦しみも災難も決して寄りつかない

えすれば生活には困らん」ということを言われております。
般若の智慧を得て、この空という心境が分かれば、それは人間性の本質をつかんだことであり、それは同時に、大宇宙の本質をつかんだことであり、絶対である。森羅万象、この絶対から出て来るという大きな心境であるから、その心境が分かるならば、人生の社会苦などはなんでもないことだ。一切の苦しみは、ことごとく消えてしまうのであります。
「願力不思議の信心は、大菩提心なりければ、天地にみてる悪鬼神、みなことごとくおそるなり」。ここへ来ると、もはや他力も自力もない。他力の信心がそのまま菩提心だ、そのまま般若の智慧であります。
能く一切の苦を除いて、真実にして虚ならず。ここで太鼓判を押して、決して間違いがないと言われているのであります。本当に人間の本質、自己の本質をつかみ、自己の真実をつかむ者には、どんな苦しみも災難も、決して寄りつくことができんのだ。こういう信念がひとつ必要だと

思います。ここまで到らないと、本当の信念にはならんと思うのであります。

第八講

故説般若波羅蜜多呪。即説呪曰。羯諦。羯諦。波羅羯諦。波羅僧羯諦。菩提薩婆訶。

故に般若波羅蜜多の呪を説かん。即ち呪を説いて曰く、羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶。

ではその偉大なる英智の呪文を示そう。

救われた。救われた。
完全に救われた。
みんな完全に救われた。
ここがお浄土だった。

故説般若波羅蜜多呪。即説呪曰

それでは、この般若の智慧を唱えごととして示そう。般若そのものが呪文であるけれども、呪という以上、言葉を示さねばならんから、そこで言葉をもって示そうと言われるのであります。

羯諦。羯諦。波羅羯諦。波羅僧羯諦。菩提薩婆訶

これが般若の唱えごとであり、この般若心経の最後を飾る言葉であります。これも翻訳をせずに原語のままですが、こういう唱えごとは翻訳をすると値打ちがなくなり、功徳がなくなります。また唱えごとでありますから、非常に音律のよいものでないといかんので、へたに翻訳をするよりは、分かっても分からんでも、「羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶」と唱えると、唱えやすいというわけであります。口で

唱えるだけで、般若の智慧が分からんでも、般若の智慧が分かっただけの功徳があると言うのであります。

人間性の本質が分かるの、真実の自己が分かるの、悟りが開けるのということは、なかなか並たいていのことではありませんが、それが分からんでも、「羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶」と唱えると、一切の苦しみから解放されることができるのであります。

この羯諦、羯諦は、翻訳をせんことになっておりますが、それでは意味が通じませんから、訳してお話しせねばならんのであります。古来、いろいろな解釈がなされ、さまざまな翻訳が行なわれています。

我れも渡りぬ、人も渡りぬ

羯諦は、渡る、向こうの岸へ渡るということ。これは動詞ですが、過去形になっていますから、「渡った、渡った」となります。初めの羯諦は、「自分が渡った」、次の羯諦は、「人も渡った」と取ってもいいでしょう。渡りぬ、渡りぬ。我れも渡りぬ、人も渡りぬ。

波羅羯諦。波羅は向こうの岸、彼岸であります。羯諦は渡った。向こうの岸へ渡った、と。

波羅僧羯諦。この「僧」は集団名詞であって、皆そろってということ。サンガということで、今日の組合と同じ意味でありますが、仏教のほうでこの僧ということは組合ということであります。一人では僧ではありません。少なくとも三人以上一所に集まらないと僧とは言えません。帰依僧というのは、一人の坊さんに帰依することではなく、団体に帰依すること、組合に加入することを帰依僧と申すのであります。

一人では僧とは言わない

この春、明石の仏教会で京都の真宗の有名な学者が講演をされ、帰依三宝という話をされました。話がすんでから後、質問になって、某市会議員が、

「いや、三宝に帰依せよというお話はよく分かりました。帰依仏はよく分かる。仏に帰依する。それはもちろん帰依します。法に帰依する。これ

もよく分かります。しかし帰依僧だけは、どうも私には承知できません。このごろの坊さんには帰依しません」

こういうキツイことを言われた。そこで議論はだいぶ賑やかになって、帰依僧ということが問題になった。帰依仏、帰依法はするが、帰依僧はせん、ということならば三宝にはならん、二宝になってしまう。「先生、どうお考えですか」と言われて、その大学者は、笑って何も言われなかったということであります。

　しかし、これはその市会議員氏の考え違いであり、偉い坊さんに帰依するということは、帰依僧ではなく、これは一人の高僧に帰依するのであるから、帰依比丘です。僧とは、大勢の団体を言うのでありますから、その市会議員が、会費を出して明石の仏教会に加入しておられるそのことが、帰依僧なのです。皆の団体に帰依することであります。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷と、男の坊さん、女の坊さん、男の信者、女の信

者、これをひっくるめた団体に帰依することを帰依僧と言うのです。
そこで、僧ということは集団の意味なので、波羅僧羯諦ということは、向こうの岸へ皆そろって渡ったということです。
菩提は悟りであります。薩婆訶というのは、完全に、確実にでき上がった、成就した、という意味になります。
羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶。渡りぬ、渡りぬ、彼岸へ渡りぬ。彼岸へすべて渡りぬ。菩提は成就されたりと。古人は、

我れも渡りぬ
人もまた渡らせ畢(お)わんぬ
彼の岸へあまねく渡らせ了(お)われり
かくて悟りの道成りぬ

と翻訳されております。私も渡った、人も渡った。向こうの岸へ渡った。皆そろって向こうの岸へ渡った。そして悟りが成就した。これが般若の

唱えごとであります。

今日、社会生活の上で進歩という言葉がよく使われます。進歩でなくてはいかん、私どもは日々進歩していかねばならんと。しかし、その進歩の終点に行ったらどういうことになるのか。進歩の終点に着いたらどういうことになるか。いつまでも進歩、進歩ではいかんはずである。終点があるはずだ。終点に着いたらどういうことになるか。

そこはやはり、平和でなくてはならん。大きな人類愛でなくてはならん。お互いが平和に愛しあっていくという世界に到着しなければならんと思う。血を流したり、闘争したり、喧嘩したりするのは、ごく低級な運動である。本当に進んで来て、進歩の最後に到着したら、お互いが奉仕の精神を持ち、合掌の精神を持ち、感謝の心を持って、皆が愛しあっていく世界がなければならん。それが進歩の終点でなくてはならんでありましょう。

般若の智慧が分かれば、人類の進歩の終点に着いたのだ

すべてそのままでよかった

その進歩の終点を、私どもは今日の政治の上では見ることはできませんが、般若の智慧が分かるならば、この人類の進歩の終点に着いたことになると言うのであります。般若の智慧が分かって、自分と社会とは別物ではない、自分と人類とは別物ではない、一体であるという悟りが開けるならば、それが進歩の終点に着いたことです。人間性の本質だ。これだけはもう変わらない、絶対に変わらない人間性の本質をついたものだ。人類進歩の終点をつかんだのだ。これが羯諦だ。

そこで自分が終点に着いてみると、「一仏成道（いちぶつじょうどう）、観見法界（かんけんほっかい）、草木国土（そうもくこくど）、悉皆成仏（しっかいじょうぶつ）」だ。自分に般若の智慧が分かると、すべての人がそのままでいいと肯定できる。悉皆成仏だ。皆そのままでいい、自然法爾（じねんほうに）だ。自分で般若の智慧が分かって、人間性の本質をついて、人類進歩の終点に着くと、すべてがそのままでよかったと肯定ができる。

自分に俳句という心境が開けると、見るもの聞くものが句の世界だ。

この世界に捨てるものは一つとしてない

自分に歌心というものが分かると、見るもの聞くもの、嬉しいことも悲しいことも人生の深刻な悩みでさえも、美しい歌に歌い出されて来る。文学の目が開けて来ると、見るもの聞くものが美しい文学の対象になって来る。町の与太者の喧嘩すらも文学の対象になって来る。罪悪さえも、煩悩さえも、お互いの文学的な対象になって来る。ロダンは、

「どんな顔でもお互いの美の対象にならん顔は一つもない。知性的な顔の人を見れば、もちろんこれは彫刻の対象になる。美の対象になる。知性のない人の顔は被われたる知性として眺めることができる。愛情に富んだ顔は、これは立派な美の対象になるが、愛情の現われん顔も、ベールを着た愛情としてつかむことができる。どんな人の顔でも彫刻の対象、美の対象にならん顔は一つもない」

と言ったそうですが、自分の心眼が開けて来ると、この世界に捨てるものは一つもない、憎むべき人は一人もない。嫌う底の法は一つもない。

すべての人が拝んで合掌されていく人格ばかりであると、こういう境地が得られるのであります。
　北野元峰という曹洞宗の管長さんが、ある時、刑務所に説教を頼まれて行かれた。じっと囚人の顔を一まわり見回して、手を合わせて、
「皆な仏さまばかりじゃ。どなたも仏さまばかりじゃ。気の毒なことじゃ。ご苦労なことじゃ」
と言って、ボロボロと涙をこぼされたら、囚人が皆な顔をうつむけて泣いてしまったということであります。それ以上は言うこともなければ、言うこともできなかった。ただ、「皆な仏さまだ、皆な結構な仏性を持っておるのに、気の毒じゃ、お気の毒なことじゃ」と、たったこれだけだ。
　こちらに般若の智慧が開けると、いかなる邪悪な者でも、いかなる悪人でも、いかなる罪悪の者でも、拝んでいける境地が開けて来る。それが、羯諦、羯諦だ。我れも渡れり、人もまた渡れり。皆な渡ったのだ。

どなたも仏さまばかりじゃ

煩悩の身のままで、人類の終点に行き着いたのだ

波羅羯諦だ。実に人類の行き着くべき終点に着いた。これから何百年かの革命をして、そうしてやがて人類が着かねばならん最後の終点へ、今このままで着いたのだ。煩悩の身のままで終点に着いたのだ。罪悪のままで、この肉体を持ったままで、人類の終点に行き着いたのだ。般若の智慧というものは、実にそういう喜びの叫びであります。

羯諦、羯諦、波羅羯諦。私も救われた、皆も救われた！

人類の最後に行き着く所へ着いたのだ、来たのだ！

波羅僧羯諦。皆な着いたんだ、皆な救われたのだ、私が救われると同時に世界中が救われたのだ！

菩提薩婆訶。人間がこの地上に生まれた、人類の最後の目的が、今日ここで解決されたのだ！

これは釈尊の胸の中からついて出た大きな喜びの叫びであります。羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶。一仏成道、観見法界、草木

国土、悉皆成仏。山も川も草も木も成仏した、皆な救われた。こういう心境が般若の心境でありますが、この言葉を唱えることによって、私どもがそういう心境を呼び戻し、呼び起こすことができるならば、まさにこれが般若の呪文であります。

上野陽一という人は、この「羯諦、羯諦」という言葉を、

　ゆきゆきておちつくさきははなのやま

と表現しておられます。我れも救われ、人も救われ、こうして皆が般若の智慧をつかんで最後に到着するところは天国であり、浄土であり、花の山であります。もうひとつ具体的にこの言葉を表現するならば、こういう心持ちではないかと思います。

わしも仏だ
おまえも仏だ
皆な仏だ

わしも仏だ
おまえも仏だ
皆な仏だ
皆そろって極楽往生

皆そろって極楽往生

こういう気持ちが、この「羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶」ということでありましょう。苦しみのある時、悩みのある時、怨みのある時、争いのある時に心の中で手を合わせて、「わしも仏だ。おまえも仏だ。皆な仏だ。皆そろって極楽往生」と、こう口の中で唱えると自分の心が和やかになって、争い心が消え、怨み心、妬み心が消えて、そこに救いが出て来る。一切の苦は救われて来る。そういう結構な唱えごとが、「羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶」であります。あるいは、これを過去形に扱わずに将来の希望として扱うならば、

我れも救われん
人も救われん
彼岸に救われん
彼岸に皆な救われん

菩提を成就せよ

私も救われたい、皆も救われたい。皆そろって救われましょう、と心に祈りを持つことになるかと思うのであります。

ここで大切なことは、「羯諦、羯諦」と重ねて言われ、さらに、「波羅僧羯諦」と言われておるところであります。自分一人が救われるのではなくして、皆と一緒に救われていくというこの心が、私どもの菩提心である。自分だけが救われるのではなく、自分だけが安楽になるのではなくして、自分と同時に人も救われていく、皆と一緒に救われていくという願いを持つこと、そのことが人類の終点でなくてはならんと思うのであります。

菩提心を持つこと、皆と一緒に救われたいという心が、実は人類の到着する終点であります。「初発心時便成正覚（しょほっしんじべんじょうしょうがく）」という言葉がありますが、「どうぞひとつ人類と一緒に救われましょう、私は救われんでも皆が救わ

皆な幸せになった時が、私の幸せになった時だ

れますように」という願いを持った時、そこで一切の苦しみから救われるのです。自分を捨てて、どうぞ社会の皆さんが幸福になるようにという願いを持った時に、私どもはもう救われているのです。

人をのみ渡し渡して己が身は
　岸にのぼらぬ渡し守かな

と、古人はうたっておられます。皆さんを渡しましょう、私は一生船の中の渡し守で結構です、というその心が渡ったということなのです。その心ができたことが、もう彼岸に渡ったということです。阿弥陀さまは、一切衆生が救われんうちは成仏せんと言われております。皆と一緒に人類が救われた時が、私の救われた時だ。全人類が幸福になった時が、私の救われた時だ、全人類が幸福になった時が、私の救われた時だ。

一軒の家で言うならば、皆が幸せになった時が、自分の幸せな時だ。妻も子供も皆な幸せになってくれた時がおれの幸せな時だと、こうお互

菩提心を発すことによって救われる

いに菩提心を発すならば、その心を発した時に、皆が一緒に救われるのであります。

我れも渡りぬ
人もまた渡らせ畢わんぬ
彼の岸へあまねく渡らせ了われり
かくて悟りの道成りぬ

皆さんと一緒に救われましょうという菩提心を発し、大きなヒューマニズムを感ずるならば、その人類愛が般若の智慧であり、これが大いなる真言であります。その菩提心を発すことによって、一切の苦しみから私どもは救われることができるのであります。

　皆とともに救われる道を行きさえすれば、必ず踏みはずすことなく救われるのです。自分だけがうまいことをしようと思うと、自分だけが儲けようと思うたら、苦しみがあり失敗があるが、皆さんとともに救われ

ましょうという心を起こすならば、「一切の苦を除いて、真実にして虚ならず」という世界が開けて来ると思うのであります。

般若心経は単に、空を説く教えではありません。その空から、お互いの現実の世界に出発をして、空ではなく、そこに生き生きとした真実をつかみ、確かにあるものをつかみ、そして現実の世界において、一切の苦しみを除いて、皆とともに理想の世界を建設していくということ、それこそが般若の智慧でなくてはならんと思うのであります。空の智慧が大きな人類愛にまで展開されて来なければならんと思うのであります。

空から生き生きとした真実をつかむ

〈著者略歴〉
山田無文（やまだ・むもん）
1900年、愛知県に生まる。早稲田中学、臨済宗大学を経て、天龍僧堂にて修行。妙心寺霊雲院住職、花園大学学長、祥福僧堂師家、禅文化研究所所長、妙心寺派管長を歴任。1989年、遷化。主な著書に、碧巌録全提唱10巻、臨済録、十牛図、般若心経毒語註、証道歌、自己を見つめる（禅文化研究所）、むもん法話集、むもん関講話（春秋社）など多数。

般若心経

昭和61年8月1日 初版第1刷発行
平成11年12月20日 初版第7刷発行
平成19年5月1日 2版第2刷発行

著者 山田無文

発行 財団法人 禅文化研究所
〒604-8456 京都市中京区西ノ京壺ノ内町
花園大学内 Tel 075 (811) 5189
http://www.zenbunka.or.jp

印刷 株式会社 耕文社

ISBN978-4-88182-188-6 C0015

般若心経

山田無文

禅文化研究所